
ポケットモンスター S P E C I A L 虹(レインボー)のトキワの力

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター SPECIAL レインボー 虹のトキワの力

【NZコード】

N0978U

【作者名】

松上

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公。

本人は断つたが、神様が無理を言って転生させてくれた。

原作知識が在る主人公は、どんな原作ブレイクをするのか？
その答えは誰にも分からぬ……

No.0 プロローグ（前書き）

どうも、松上です！

ボケスペの小説が無かつたので書いてみました！！

頑張りますので応援してください！！

N・O・O プロローグ

まずは俺の昨日の事を話させてくれ。
俺は昨日まで普通の中学校三年だった。

世間では俺の事を受験生って言つてゐる。

今の時代、高校に行かない奴が就職できる確立は極めて少ない。

なので、俺も高校に行くために勉強してた、昨日まではだ。
昨日は宿題が沢山有ったので夜遅くまで宿題をしていた。

そして、宿題が終わつたのは夜の十一時を過ぎていた。

俺は宿題を鞄に入れて直ぐに布団に入つて寝た。

そして、旦が覚めると白い部屋だつた。

最初はまだ夢の中だと思つていた。

だが、幾ら旦を覚まそうとしても旦が覚めない。

なので俺は一度顔を殴つてみた。

痛みが有つた。

なので、誘拐されたと思つた。

俺は周りを見渡した。

白一色の部屋

俺が寝ていた時に使つていた枕

土下座しているお爺ちゃん

土下座しているお爺ちゃん？

俺「なあお爺ちゃん、何で土下座してるんだ？」

俺は土下座しているお爺ちゃんに聞いた。

お爺ちゃんは俺に謝つていた。

お爺ちゃんは俺に謝つていた。

だが何故俺に土下座してんのだ？

俺「何で土下座してるんだ？」

お爺ちゃん「実はな

ワシがお主を殺してしまつたんじや。」

・

・

・

・

・

俺「は？何言ってんだよ？」

マジで何言ってんの、このお爺ちゃん？

俺が死んだって？

冗談にも程があるだろ。

俺は昨日まで普通に生きてたぜ。

不治の病とか、余命が宣告されたわけじゃない。

普通の中学三年生だぜ。

なのに、何で急に死なんだよ・・・

俺が考えていたらお爺ちゃんが話し始めた。

お爺ちゃん「実はな、ワシはお主の世界で言つ“神”なんじやー。」

神様だつて？

OKOK、惚けたんだな、了解だ、突っ込むぜ。

俺「なんだ、突っ込むんじやないぞ。」何故突っ込むのが分かつたんだ？」

何で分かつたんだ？

お爺ちゃん「ワシが、何でお主の思つた事を分かつたか考えとるじやろ。ワシは神様じや。お主の心の中へりい読めるわい。勿論、お主の事も知つておるぞ。」

・・・・・」のお爺ちゃん、マジで神様だ。

神様「やつと認めたの。マジですまんのお、お主を死なせてしまつて・・・・」

俺「神様なら何で俺を死なせたんだ？」

神様「実はの、ワシ等神はお主達人間の寿命などを管理しておるんじや。それでじやな・・・」

大体分かつた。

俺「つまり、神様が俺の寿命に何かして、俺が死んだわくだな？」

神様「そうじや、すまんかつたな。」

小説ではこういった神様に脅迫したり、襲つたりして能力を貰つて転生する奴が多かつた気がする。
正直、神様が可愛そうだと思う。
まあ、俺はそんな事しないがな。
それより、俺は天国に行くんだろうか?
それとも・・・地獄?

神様「お主には転生してもう。お主の様な優しい人間をこのまま死なせとくとワシは死んでも死にきれん。」

神様は死ぬのか?

正直、転生しなくてもいいんだが、神様がさせたいって言つてるからな・・・

俺「それで、俺は何処に転生するんだ?出来るなら長生き出来る世界が良いんだが。」

死んだら嫌だしな。

神様「お主が転生する世界は『ポケットモンスター SPECIAL』世界じゃ。』

マジで?

読んでたけど、まさかその世界に転生するなんてな・・・

神様「それで能力は何が欲しいのじや?」

俺「ポケモンの世界に能力があつたらダメだろ。」

神様「じゃがのぉー・・・・そづじゃー・・・この世界だけの能力があるじゃろー・・・確か『トキワの力』じゃつたかのぉー・・・この力をお主に授けるぞ。」

確かに能力くれるのはいいんだがよ・・・

俺「その力はトキワシティ出身の奴じゃないと授からないだろ?」

しかも、かなりの低確立でしか授からない力のはずだつたよな・・・

神様「それなら大丈夫じゃー・・・お主はトキワシティに転生させるからな。」

それなら、矛盾しないな。

神様「この力は確か、使いすぎると眠くなるじゃつたな。じゃが、お主に授ける力はお主の体力が続く限り使えるから安心するんじゃ。しかも、死んでいない限り、お主はそのポケモンを救えるからの。」

俺「分かつた、それじゃあ転生させてくれ。」

神様「頑張るじゃぞ。」

俺「じゃあな。」

神様がそう言つと俺の体は透け始めた。

そして意識が消えそうになつた時、神様が慌てて言つてきた。

神様「そうじゃ、お主はイエローと言つ少女の隣の家に転生するか

らのーー！」

m a j i d e ?

そう思いながら俺は意識を失った。

No.0 プロローグ（後書き）

次回はキャラ設定です

お楽しみにー！

No.1 キャラ設定（前書き）

今回は主人公の設定です

ネタバレを含みますが・・・

No.1 キャラ設定

主人公

レインボー

性別 男

年齢 イエローと同じ年

容姿 新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚 カヲルを幼く小さくした姿

性格 誰にも優しいが命を大切にしない奴には絶望を見せる

能力 トキワの力

(ポケモンと話せたり回復させたり出来る。普通はこの力を使うと睡魔に襲われ眠ってしまうが、レインボーは体力が続く限り使うことが出来る。しかも、死んでいない限りポケモンを一瞬で回復させる事が出来る。)

備考 神様のミスで死んでしまった人間。

転生に興味が無かったが、神様がどうしてもさせたいと言つたので転生した。

イエローと同じ年で幼なじみ。

誰にでも優しいが、イエローには（無自覚で）凄く優しくするのでフラグを建てている。

誰にも優しいが、命を大切にしない奴には絶望を見せるまで攻撃する。

また、両親は不慮の事故でレインボーが三歳の時に他界している。

No.1 キャラ設定（後書き）

次回はレインボーがあるポケモンと会います

まあ、楽しみにしていてください！！

No.2 僕と幼なじみとパートナー（前書き）

題名がバカテスの題名みたいですね・・・

まあ、気にしないでください

No・2 僕と幼なじみとパートナー

s i d e レインボー

よう、久しぶり！！

えつ、誰だか分かんねえって？

ほら、NO・O に出てきた神様じゃない方の奴だ。

ずっと、『俺「～～」』って話してたから分かんねえかもしれないけど、転生して俺の名前はレインボーになった。

今、俺は五歳になった。

えつ、何で飛ばしたかつて？

赤ん坊の頃の事を聞いて何が楽しいんだよ？

あんなの、羞恥プレイってやつだぞ。

使い方があるてるか知らねえがよ。

起きて、母親の母乳飲んで、少し遊んで、寝る。

こんな事聞いたって面白くないだろ・・・

俺は自分の家で昼飯を作っている。

何で昼飯を作ってるかつて？

・・・・両親が事故で死んだんだ。

その時、俺は家に居たから余り知らないがポケモンが事故を起こしたらしい。

死んだって聞かされた時は泣いたぜ。

第二の親だけど、俺を育ってくれた親に違ひはない。
だから、沢山泣いて、泣いて、泣いて、泣いた。

そして決心した。

両親が生きられなかつた人生を俺が精一杯楽しむ。

これが、俺の出来る最初で最後の親孝行だ。

親戚の人々が『家に来ればいい』と言つてくれたが、俺は断つた
俺はこの家で過ごしたかったからだ。
それを言つたら皆は分かつてくれた。

だけど唯一、分かつてくれない人物が居た。

それは・・・

「レイン君、お匂い飯が出来たから一緒に食べよーー。」

俺のお隣さんで、金髪の髪をポニーテールで纏め、見れば可愛い女の子に分類される俺の幼なじみの

レイン「インターホンを鳴らさずに入ってるなよ、イエロー。」

イエローだ。

言い忘れてたが、俺のあだ名は『レイン』だから、そここの所を分かつておいてくれよな。

イエロー「そんな事より、お匂い飯が出来たから一緒に食べよーー。」

そんな事で済ますイエローは凄いよな・・・鍵を掛けない俺も悪いけど。

レイン「俺も昼飯は作ったんだけど・・・」

俺は既に炒飯を作り終わって、食べようとしていたのだ。

イエロー「そ、そなんあ」

イエローはその場に座り込んで泣きそうになっていた。

レイン「！？きゅ、急にイエローの家でご飯が食べたくなったなあ。

アハハハハハハ

俺がそう言つとイエローは泣き顔から笑顔になつた。

やつぱ人は笑顔でないとな！！

俺はイエローの頭を撫でた。

イエローは顔を赤くしながらも気持ち良さそうな顔をして、俺にもたれかかってきた。

「レイン、お腹が空いたから飯を食べに行こ。」

イヒロー「うん…！」

イエローは俺の腕に抱きついて答えてきた。

正月は恋が叶う日

「まあ、直ぐ隣なんだけどな・・・。」

俺はトキワの森に来ている。
え、どうして飛ばしたかつて？
『二瓶食べるご子の所を聞きたい』

「お食へるだけの所を置きたしのか？」

まあ、何時もの事なんだけどな・・・・

イエローの母さんはクスクス笑いながら俺達を見てたけどな。

「どうしてトキワの森に来たのか分かんねえよな？」

実は俺も分かんねえんだ。

無責任かもしけないが、突然呼ばれたような気がしたんだ。
そして、気が付いたらトキワの森だった。

レイン「これもトキワの力が関係してるのでか？」

思い当たる事はこれしかない。

神様から貰つた（無理矢理付けられた）トキワの力・・・
ポケモンと話す力を持っているが、それは力を使っている時だ。
俺は今まで力を使つた事が無い。
なので、トキワの力が俺を呼んだのかも定かではない。

レイン「取り敢えず億に進んでみますか・・・」

俺はトキワの森の奥に入つていった。

レイン「取り敢えず一番奥に来てみたが・・・何もない。」

周りは木、木、木

あとは草むらくらいだ。

此処までポケモンに会わなかつた。

それは嬉しい事なんだが、逆に一体とも会わないと気持ちが悪い。

『・す・て』

！？

突然、誰かの声が聞こえた。

『た・す・』

その声は弱々しく、今にも消えそうな声だった。

レイン「おー、何処にいる……俺に何を伝えたいんだ……！」

俺は大きな声で叫ぶ。

『たすけて……たすけて』

それは、俺に助けを求める声だった。

レイン「何処だ、何処なんだ……教えてくれ、トキワの森……」

俺はトキワの森に叫んだ。

そうすると、トキワの森が風の影響で騒ついた。

“真っ直ぐ進めば貴方が望む場所に行ける”

そんな声が聞こえた。

レイン「あ、あじがどう、トキワの森……待つてろよ……！」

俺はトキワの森にお礼を言って、前を向いて走った。

レイン「はあ……はあ……お前が俺を呼んだんだな？」

俺はトキワの森の言葉通り真っ直ぐ走った。

そこには沢山のポケモンに囮まれていて、体中に怪我をしていたロコンが居た。

ロコン『…………たすけにきててくれたの？』

ロコンは田だけを俺に向かって、弱々しい声で聞いてきた。

レイン「嗚呼、俺がお前を助けに来た！だから安心しろ……」
俺はそう言い、ロコンの近くに行き方膝を付いてロコンに手を向けてた。

ロコン『…………いや…………』

ロコンは俺が手をやると怯えながらそう言った。
ポケモン達も俺に攻撃しよう準備した。

レイン「大丈夫だ、俺はお前を救うだけだ。俺はトキワの力を受け継ぐ男だからな。」

俺がそう言つとポケモン達は警戒する事を止めた。

ロコンはまだ体が震えていた。

レイン「大丈夫、必ずお前を救つてやる。」

俺はロコンを抱き抱えそう言った。

ロコンは、俺の言葉を聞くと田を瞑つた。

信用してくれたんだろう。

俺は座り、ロコンを足に乗せた。

レイン「安心しり、必ず救つてやるからな！！」

そう言つて俺は手に神経を集中させた。

そうすると、俺の手から七色の光が出てきた。

その光はロコロンを覆つ。

そうすると、ロコロンの傷が無くなつていった。

レイン「…………ふうー、無事に治せた。」

俺がそう言つと、ポケモン達も安心した顔をした。

マジで無事に治せて良かつたぜ。

やっぱ、トキワの力は扱いが難しい。

もつと訓練しないとな……

ロコロン『う・・・うーーん・・・』

ロコロンが田を覚ました。

レイン「よつ、体の方は大丈夫か？」

体の傷は消えていてもダメージが無くなつたかどうかは分からぬ。なので、俺はロコロンを持ち上げ聞いた。

ロコロン『す、凄いよ！死にそつだつたのに体が全然痛くないよ！
！ありがとう・・・えつと』

体は大丈夫みたいだな。

お礼を言つてくれたらしげが名前が分からんよつだ。
そりやそうだ、まだ名乗つてないもん！－

レイン「俺の名前はレインボー、昔からレインって言われてる。トキワシティ出身で、トキワの力を受け継いだ男だ。」

俺に関する事と言えばこれくらいかな？
流石に転生者って事は黙つとかないとな。

ロコン『レインって叫んだ！！ありがとうね、レイン！』

そう言つてロコンは俺の頬を舐めてきた。

レイン「どういたしまして。それで、何でみんなに傷だらけだったんだ？」

いくらポケモン同士の戦いが有ったとはい、この森にロコンの弱点である水タイプや地面タイプは生息していない。
なので、そこまでボロボロだった理由が思いつかない。

ロコン『実は・・・』

ロコンは俺に理由を話してくれた。
だが、理由を聞いて怒りが込み上げてきた。

ロコンはロケット団に襲われたらしい。

ロコンは違う所に居たらしいが、ロケット団が攻めてきてこのトキワの森まで逃げてきたりしい。

逃げる途中で何度も攻撃されたので、使に掛けていた様だ。

ロケット団・・・こんな早い時期から活動してたなんてな・・・
レッド達と潰すか？

だけど、俺にはポケモンがいねえ・・・
ダメ元で頼んでみるか・・・

レイン「なあ、ロマン?」

ロマン『どうしたの、レイン?』

レイン「俺のポケモンになつてくれないか?」

俺はロマンに頼んだ。

No.2 僕と幼なじみとパートナー（後書き）

次回はテンプレ通り？の展開です

お楽しみにー！

No.3 新たな家族と新たなる旅立ち（前書き）

今回も話の展開が急です

マジでムー―――――い心で読んでください――――！

N o . 3 新たな家族と新たなる旅立ち

s.i.d.e レイン

レイン「俺のポケモンになつてくれないか?」

ロコン『うん、いいよ』

そつだよな、今日初めて会つた奴に付いてきて……え?

レイン「すまん、もう一度だけ言ひてくれるか?」「

ロコン『?? レインのポケモンになつてもいいよ』

m.a.j.t.e?

ロコン『これからもよろしくね、レイン』

ロコンはさう言つて俺の頬を舐めた。

レイン「あ、ありがとな!…じゃあ、これからもよろしくな!…!」

俺はモンスター ボールを出した。

『お前はモンスター ボールを持っていたのか』と言つ突つ込みはないでほしい。

俺はロコンにモンスター ボールをあてた。
ロコンはモンスター ボールに入った。

レイン「ゲットだ・・・出でここ、ロコン!…!」

俺はロロンをモンスター・ボールから出した。

ロロン『今からレインの為に頑張るよーーー。』

ロロンは出てきて、そう宣言した。

トキワのポケモン達は俺達に戦い挑む事はせず、自分達の住みかに帰つて行つた。

レイン「や、ロロン。家に帰りつけ。」

ロロン『うん。』

俺達は家に帰つた。

三日後・・・

イエロー「いやだよ、いかないでよ、れいんくん。」

レイン「泣くなよ、イエロー。一生会えなくなるわけじゃないんだからさ。ただ、少しだけ旅に出るだけだからよ。」

俺は家の前に居る。

今日から俺は様々な地方に旅に出る。

理由は、強くなるためだ。

今の俺は、ポケモンバトルの知識が無い。

なので、旅をして知識を身に付けたい。

イエロー達には、ロコンをゲットした田川と言っていた。

そして、旅に出る今日にイエローが泣きだした。

本当は俺も別れたくないんだが、未来に起らるであろう事件に備えるためにそう言つてはいられない。

「イヒロー」「で、でも。」

うーん・・・・・そうだ！！

レイン「イエロー、俺は約束する。必ず帰つてくれる。だから、待つ
ていってくれないか?」「

「…おれここにいるんだが、おまけにかかって、わたくしの娘がここにいたんだからね。」

レイン」「嗚呼、必ず帰つておたり聞いてやる……じやあ、行つてくる——。」

俺はトキワの森に向かつて歩きだした。

イヒロー「まつてゐからねえ———..」

俺は手を振りながら歩いた。

ロコン『レイン、最初は何処に行くの?』

モンスター・ボールの中に入っていたロコンが話し掛けてきた。

レイン「最初はカンターを回ってバトルの知識を覚える。その後はジョウト、ホウエン、シンオウを回って仲間を増やす。時間ががあればイッシュに行く予定だ。」

原作までにシンオウまでは回らないといけない。
イッシュは行かなくても良いからな。

ロゴン『やうなんだあ・・・頑張りうね、レイン！』

レイン「嗚呼……」

俺達は強くなるために旅に出た。

N o . 3 新たな家族と新たなる旅立ち（後書き）

次回は帰ってきたレインとポケモン達との出会いと設定です

まあ、ネタバレですが・・・

お楽しみに！！

No.4 キャラ設定（前書き）

ネタバレだよ・・・

この前、キャラ設定したばかりなのに・・・

ポケモン達のレベルもチートだし・・・

広―――――心を持って見てください――!――!

No.4 キャラ設定

名前	レインボー
性別	男
年齢	イエローと同じ年
容姿	新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚 カヲルを小さくした姿
性格	優しい・面倒見が良い・心配性・命を大切にしない奴には非情
能力	トキワの森の力 (ポケモンと話せたり、ポケモンの怪我などを治したり出来る。普通、この力を使うと睡魔に襲われ眠ってしまうが、レインは体力が続く限り使える。 死んでない限り、ポケモンを一瞬で治す事が出来る。 ポケモンとボールから出さなくとも話せる。 トキワの森と話す事が出来る。)
備考	神様のミスで死んでしまった人間。 転生に興味が無かったが、神様がどうしてもさせたいと言つたので

転生した。

イエローと幼なじみ。

誰にも優しいが、イエローには（無自覚で）凄く優しくするのでフラグが建っている。

優しいが、命を大切にしない奴には非情になり、謝られても攻撃を止めない。

原作に介入するためにカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウを旅し、ポケモンバトルの知識を学び仲間を集めた。

イエローと約束をしているので、何をお願いされるのか分からないので楽しみにしている。

名前
ロコン

性別

性格
甘えん坊

レベル

67

備考

レインにより救われたポケモン。

レインの事を一番信頼しており、凄く甘えん坊。

寝る時も勝手にボールから出てきて、レインの布団に潜り込んで一

一緒に寝ている。

異性としてレインの事が好き。

名前
ラプラス

性別

性格
臆病

レベル

61

備考

レインがカントーを旅している時に出会った。

主人に捨てられ、海岸で死にかけていた時にレインに救われた。
命の恩人であるレインについて行こうとしたが、「俺はお礼が目的
で助けたわけじゃない。俺が助けたいと思ったから助けただけだ。」
と言われ、レインにお礼じゃなく自分の意志について行くと言つて
レインの仲間になる。

臆病な性格だが、レインの為なら強敵だらうと立ち向かえる。

性格	性別	名前	バンギラス
----	----	----	-------

性格	クール
レベル	72

備考

レインがジョウトを旅している時、ヨーギラスの時に出会った。色々な人間から狙われ、ボロボロになっていた所をレインに救われた。

最初はレインの事を警戒していたが、レインの優しさを知り一緒に旅に出ることを決意する。

レインの為なら体を張つても守るひつとする。

頑張り屋

レベル
76

備考

レインがホウエンを旅している時、タツベイの時に出会った。
生まれた時から一人であつたので、色々な人間に捕まり売買されて
いた。

監禁されている時、レインがその場所に乗り込んで来て救われた。
レインが自分の為に頑張る姿を見て、一緒に旅に出たいと言い仲間
になる。

レインのポケモンの中でも切り込み隊長。

名前
ルカリオ

性別

性格
勇敢

レベル
54

備考

レインがシンオウを旅している時に、偶々出会ったゲンから貰った卵から孵ったポケモン。

ゲンはレインに渡す際、「君は普通の子と違つ。君と一緒に居るポケモン達は本当に楽しそうだ。なので、この子を大事に育ててほしい。」と頼んだ。

レインはその言葉に頷いた。

レインのポケモンの中で一番レベルが低いが、ルカリオ自身は気にしていない。

「自分が出来る精一杯の事をする」という気持ちがある。

レインもその気持ちを知っているので、一番応援されている。

名前
グレイシア

性別

性格
寂しがりや

レベル

68

備考

レインがシンオウを旅している時に出会った。

元々、棲息地が不明なため沢山の人間にゲットされそうになつた。
仲間にも追放され、一匹で歩いている所をレインに保護された。

最初はレインの事も自分を捕まえに来た人間だと思い警戒していたが、レインの優しさを毎日触れレインに恋をする。

レインに自分からついて行くと言って仲間になる。

ロコンとはレイン大好き仲間であり、ロコン同様夜レインの布団の中に勝手に潜り込んでいる。

No.4 キャラ設定（後書き）

次回は帰ってきたレインの話です

お楽しみにーー！

N o . 5 帰ってきた男（前書き）

原作はもつ少し後です

今回も無理矢理です

広一一一一心で読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

N.O.5 帰ってきた男

s.i.d.e レイン

レイン「・・・何年ぶりだろ?」

俺は丘の上からある町を見て、そう呟いた。

ロコン『でも、此処に帰つてるのは本当に久しぶりだよねー。』

俺の右隣に居たロコンが俺に呟つてきた。

グレイシア『此処がレイン君の故郷ですか?』

俺の左隣に居たグレイシアが俺に聞いてきた。

レイン「さうだ此処が俺の故郷だぜ。」

俺はグレイシアを持ち上げて言った。

グレイシア『お、教えてくれて、あ、ありがとうございます//
//』

グレイシアは顔を赤くしてお礼を言つてきた。

ロコン『レインへ、私も抱っこしてよ。』

ロコンが俺のズボンを引っ張りながら言つてきた。

レイン「分かったよ。」

俺はグレイシアを頭に乗せて、ロコンを持ち上げた。

レイン「悪いな、グレイシア。これで良いか、ロコン?」

グレイシア『だ、大丈夫です／＼／＼／＼』

ロコン『う、うん／＼／＼／＼』

何で顔が赤いんだ?

病気じゃないよな···

なら大丈夫か。

レイン「それじゃあ行こうぜ! ! !

ロコン・グレイシア『うん(はい) ! ! !』

俺は田の前にある町に向かった。

レイン「トキワシティ···元気かな?」

あいつは元気だらうか?

レイン「早く会いたいぜ、

「イエロー。」

俺はイエローの所に向かった。

s.i.d.eイエロー

イエロー「行つてきまーす！！」

僕はお母さんに挨拶をして外に出た。

レイン君が旅に出て数年が経つた。

僕は、レイン君に負けないようにポケモンの事を毎日勉強している。
手紙が前まで来ていたんだけど、最近は来ないんだ。
だけど、お母さんは最近何時も笑顔でカレンダーを見てた。
何かあるのかな?と思いながら過ごしてた。

「あ、お早よ!さと、イエロー。」

僕が走つると、近所に住んでいるおじさんが挨拶してきた。
イエロー「お早よ!さと!まーす！！」

僕は頭を下げて挨拶をした。

「元気だなあ、まあ今日はあの日だからなあ・・・」

「あの日?」

イエロー「おじさん、あの日って？」

「…？」いや、な、何でもないよ…あ、あはははは

何だらう、凄く気になるな・・・

イエロー「それじゃあ、僕は勉強があるんで！――」

そう言って僕は近くの小川に向かった。

イエロー「あがポッポで・・あがコラッタ。」

僕は小川にいるポケモンの名前を言つていった。

イエロー「は・・・・・会いたいなあ。」

僕は寝転がつて、空を見ながらそりやくした。

イエロー「レイン君・・・」

僕はその後も空を見続けた。

太陽が西の空に傾いてきた。

イエロー「そろそろ家に帰る・・・」

僕は立ち上がりつて背伸びをして、家に向かつて歩きだした。

イエロー「あれ、何でこんなに人がいるんだろう? 今日は祭りがあつたかなあ。」

太陽は沈んで、暗くなってきたのにトキワシティの人々が沢山外にいた。

しかも、皆は同じ方向に向かつている。

イエロー「あ、あのあ、今日はお祭りがありましたか?」

僕は近くにいた人に聞いた。

「何言つてんだ! ? あいつが帰つてきたんだよ! !だから、皆はあいつの所に向かつてんだよ! !」

あいつって?

「な! ? お前マジで言つてんのか? レインボーだよ、レインボー! ! あいつが帰つてきたんだよ! !」

え?

「おいお前! ! イエローには内緒だろ? うが! ?」

「あつ! ?」

「い、イエローーー！」

僕は直ぐに家に帰った。

イエロー 「お、お母さんーー！」

僕は家のドアを開けた。

「あー、イエローーー！お帰りなさいーー！良いといひに帰ってきたわーー！」

お母さんが何時も以上に喜んでいた。

「ふうー、気持ち良かつたあ。」

お風呂場から声が聞こえた。

僕はゆっくり歩きだした。

ガチャツ

お風呂場の扉が開いた。

そこには、アッシュブルグレイの耳に掛かるくらいの髪に赤い瞳をし、白い肌をした男の子がいた。

男子の子は僕を見ると一瞬驚いた顔をしたけど、直ぐに僕に頬笑んでくれた。

イエロー「レイン君……なの？」

僕が聞くと男の子は頷いてくれた。

レイン「久しぶりだな、イエロー。」

数年ぶりに僕が会いたかつた男の子、レイン君と再開した。

No.5 帰ってきた男（後書き）

次回はレインヒューローの再開の話です

多分、甘くなりますね

お楽しみに！！

20. インローカーテンの氣持ち？（前編）

“どうしてなってしまったんだ…

今日は俺が思ひに甘い話です

ブラックマーティーを左手に持つて読んでください

No.6 イエローとレインの気持ち？

s i d e イエロー

やつと会えた・・・

ずっと会いたかった・・・

会って沢山お話をしたかった・・・

一緒に笑いたかった・・・

無理だった・・・

でも、今日からは違う・・・

だって

レイン君が

帰ってきたからー！ー

s i d e レイン

イエローに挨拶したのに無視された。

俺って嫌われてるのか？

俺はイエローの母さんの所へ向かった

レイン「すいません、俺って嫌われてますか?」

「フフフ、違うわよ。只、少し驚いてるだけよ。」

イエローの母さんは笑いながら俺に言つてきた。

・・・・そ、そ、うか！

お風呂から出てもたがひ驚いているのか
内尋内尋。

お風呂から出したら、いつや驚くな。

それだけのヒントで分かつた俺を讃めてくれ！――

イエロー「レイン君ーー！」

ガバツ

・・・状況を説明するぜ。

一人で自問自答していたら、突然イエローが抱きついてきた。イエローの母さんは、物凄い笑顔だ。

Why?

イエローは物凄く嬉しそうだ。

Why?

落ち着け、落ち着けば答えはきっと見えてくるはずだ！！

すうー・・・・はあー・・・・すうー・・・・はあー
よし、落ち着いた！！

まずは、イエローが何故こうなったのかを聞かないとな……

レイン「い、イエロー？」

イエロー「レイン君」

ダメだ、この子は自分の世界マイワールドに入ってしまった。

だが、凄く可愛い！！

誰だ、ロリコンと言つた奴は！？

俺とイエローは同じ年だ！！

だから、俺は決してロリではないからな！！

勘違いしないでくれよ！！

いいか、こんな可愛い女の子が抱きついていて尚且つ幸せそうな顔をしている！！

それを可愛いと思わない奴は少し、否、かなりおかしいのだ！！

・・・スマン、少し暴走した。

取り敢えず、離れてもらいたい。

お腹が空いて倒れそうだ。

レイン「イエロー、離れてくれないか？」

イエロー「ええ！？れ、レイン君つて僕の事、嫌いなの？」

イエローは涙目になりながら聞いてきた。

か、可愛い・・・

・・・本当にレッドが羨ましいよ。

でも、誰が誰を好きになる・・・前にも言つたような気がするが、まつ、良いか！！

レイン「大丈夫だ。俺は、イエローの事が（友達として）好きだぞ。

L

俺は笑顔で言う。

人と話す時はせつは、笑顔で話すのが良いんだよな。これ、今回の旅で学んだことの一つか。

イエロー「えっ・・・えええええ！？れ、レイン君つて僕のこと（恋愛対象として）好きなの！？／＼／＼／＼／＼／＼」

何故嘘を吐く必要があるんだ？

レイン「嗚呼。俺は、イエローの事が（友達として）好きだ。この気持ちに偽りはない。」

俺がそう言うとイエローは顔を赤くして下を向き、イエローの母さんは先程以上に笑っていた。

何処に笑う要素があるんだ？

「レイン、「イエロー、お腹が空いたから」」飯が食べたい。離れてくれるか?」

イヒロ—「ハニカム」

イエローは顔を赤くして離してくれた。
素直な子は好きだぞ。

likeの方だがな。

「レイン、『イヒローの母さん、お腹が空いたので』飯をくださ。」

「フフフ、別にお義母さんでもいいのよ。」

イヒロー「お、おやぢでえーー?」

俺がそう言つとイエローの母さんは[冗談を言い、イエローはそれを本気にして怒つていた。

これは俺も参加した方が良いのか?

だろう。

「レイン、そうですか？なら今日から義母さんと呼びます。」

「本当? 良かつたわねえ、イエロー。」

イヒロー「おおおおお風お風呂にはははは入る~~~~~」

イエローはそう言ってお風呂場に走って行つた。
そこまで本気にしなくてもいいのに・・・

「フフフ、イエローもまだまだ子供ねえ。」

絶対にこの人はSだ。

間違した

「さ、レイン君、ご飯にましょ。手伝つてちようだい。」

やつどご飯かあ。

腹減つたあ。

レイン「分かりました。」

俺はご飯の準備をした。

Side 1

い。
「レイン、嗚呼、俺はイエローの事が好きだ。この気持ちに偏りはない。

僕は湯槽に浸かって、レイン君の言葉を思い出す。

レイン君も僕もお互いに画思いたってたんだね…

傷口辺を一掃する

良からぬ事、萬

良かつた、夢じやなかつた。

お願いして置かれるかな？

「イエロー、何時までお風呂に浸かってるつもり?」

お母さんの声が聞こえた。

そんなに長く浸かってたのかなあ？

イエロー「今直ぐ出るよーーーー。」

僕はそう言つてお風呂から出た。

sideレイン

どうしてこうなった?

急に何を言ひだすのかって?

それじゃあ簡単に説明するぜ。

イエローがお風呂から出でてくる（髪を降ろしたイエローも可愛かつた）これ重要だぜ

笛でご飯を食べる

ポケモンを見せてほしいと、トキワシティの人全員に頼まれる

原作ブレイクしたくなかったので、ロコソとラプラスとバンギラスだけを見せた

そんなこんなで眠気が俺を襲つてきた

イエローの母さんが、泊まつていけと言つてくれた

俺了承する

何処で寝るのかを聞く

イエローの部屋と答えられる

俺茫然とする

そんな俺をイエローが手を引っ張つて部屋に連れてきてくれた
イエローと俺、一緒に布団で眠る（警察に電話しないでほしい）
これ重要

イエローが俺に抱きついてくる 今此処

分かったか？

イエロー「レイン……くん……だいすき……」

・・・likeだよな？

loveじゃないよな？

loveだったらいじょうう……

ロコン『取り敢えず、今日は寝た方が良いよ。』

グレイシア『そうです、今日は寝た方が良いですよ。』

確かにそうだが……

お前等、何時にボールから？

・・・まあ良いか

レイン「やうするわ……ふあ……お休み、イエロー、ロコン、
グレイシア。」

ローリン『お休み、レイン。』

グレイシア『お休みなさい、レイン君。』

俺は目を瞑り、意識を手放した。

No.6 イヒローとレインの気持ち?（後書き）

次回から原作開始！！

次回はあの電気ネズミがー？

お楽しみにー！

N o . 7 電氣ネズミがいたよ・・・（前書き）

今回のラストにあのキャラとあのポケモンが出ますーー！
まあ題名で分かると思いますがね

今回も無理矢理なので、心を込めて読んでください
変な所・誤字・脱字があれば教えてください

N o . 7 電気ネズミがいたよ・・・

s i d e レイン

：

・・・・・

・・・・・

・・・・・

レイン「ん・・・ふあーあ・・・よくねた。」

俺は目を覚まし上半身を起こし、固まつた筋肉を解した。
俺は時計を見た。

午前六時十八分五十三秒

レイン「十八分も多く寝てたのか・・・まあイエローと一緒に寝て
たからな。」

何時もは六時に起きるのだが、昨日はイエローと寝たので少し、ほ
んの少し興奮して疲れなかつた。
ほんの少しだけだからな！
頼むから警察には電話しないで！
お願ひな！！

レイン「・・・あれ、イエローが居ない。何処に行つたんだ？」

隣を見るとイエローが居なかつた。

ロコンとグレイシアも居なかつた。
何処に行つたんだ？

ラプラス『レイン君、イエローさんはリビングに向かいましたよ。』

バンギラス『ロコンとグレイシアも、イエローに付いていつたぜ。』

マジか？

何故こんな朝早くから起きたんだ？

ロコンやグレイシアならまだ分かるが・・・

何故イエローが？

取り敢えず、行ってみれば分かるか。

レイン「それじゃあ起きますか。」

俺は服を着替え、ベルトを腰に巻いてリビングに向かつた。
服装は、黒のシャツに白のカッター、黒のズボンだ。
正直な話、この服がお気に入りなんだよな。

レイン「それじゃあ行きますか。」

俺はリビングに向かつた。

ロコン『レイン、此処から先は行かせないよーー。』

グレイシア『レイン君、これ以上先に進みたければ私達を倒して行つて下さいーー。』

何でこうなってるんだ？

俺は普通に扉を開けた。

そしたら、一休がドアの前に居てそう言つている。
本当にどうしたんだ？

レイン「何で先に進んじゃダメなんだよ？」

俺は一休に聞いた。

ローラン『秘密だよ！』

グレイシア『秘密です！』

秘密って言われたら氣になるのが人の定め。
だが、一休を傷つけたくないんだよな・・・
此処は大人しく引き下がるか・・・

レイン「分かつたよ、準備が出来たら呼んでくれよ？」

俺はそう言つて部屋に戻つた。

一休は凄くはしゃいでいたが・・・

レイン「・・・暇だ。」

部屋に戻つて既に二十分は経過した。
未だに呼びに来ない。
どうすればいいわけ？

ルカリオ『レイン、僕と将棋をしないか？将棋の駒と板はあるみたいだし・・・』

ルカリオが提案してきた。

まあ時間が潰せるからいいか。

後、ルカリオが将棋を出来る事に関しては深く考えないでほしい。理由は聞かないでもらいたい。

レイン「それじゃあやるか。何故イエローの部屋に将棋の駒と板があるのかは疑問になるが。」

俺は、モンスター・ボールからルカリオ出しながら疑問に思った。

ルカリオ『それじゃあ始めようか。』

レイン「おう、負けないぜーー！」

俺達は将棋をし始めた。

レイン「・・・詰み、だな。」

ルカリオ「・・・くそ、負けた。』

レイン「ふう、危ねえ危ねえ。なんとか勝てた。』

将棋の勝負は、俺の勝ちで終わった。
えつ、何で飛ばしたかつて？

将棋をしてる描写を誰が読みたいんだよ？

だから飛ばした。

悪いな！！

ルカリオ『しかし、これで時間が潰せたね。』

ルカリオに言われ、俺は時計を見た。

七時十一分五秒

将棋に集中すぎて、全く時間に気付かなかつた。

レイン「もう大丈夫だろ。」

俺はルカリオをボールに戻し、ドアを開けた。

レイン「・・・はあ、何で呼びに来ないか分かつた。」

俺の目の前には、仲良く眠つているロロンとグレイシアがいた。
俺はボールに一体を戻し、リビングに向かつた

レイン「すいません、一度寝してしまいました。」

ロロンとグレイシアの事を怒つてほしくないから、俺は嘘を吐いた。

イエロー「レイン君ーー！」

ガバッ！！

イエローが抱き付いてきた。

「レイイン君も来た事だし、朝ご飯にしましょ
俺は信じてるぞ。

「レイイン君も来た事だし、朝ご飯にしましょ」

イヒローの母さんが笑顔で言つてきた。
そうしまじょ、腹と背中が今にもくつつきかねですから。

レイイン「ピカチュウですか?」

「やうなのよ、最近一ビシティでピカチュウの被害で悩困つてゐる
よ。」

俺はピカチュウの話を聞いていた。

ピカチュウって事は、原作が始まってるんだな・・・
今日の明け方にレッドがトキワに来たといつ事だな。

「だからね、レイイン君に懲らしめてもらいたいのよ。」

うーん、どうしようか・・・
原作に入るべきか・・・
一度見てから決めるか。

レイイン「一度見てから決めます。取り敢えず、ご飯を食べさせてく
ださい。こんな美味しいご飯を冷ましたくないですから。」

イヒロー「ほ、本当、レイイン君ー?」

イエローが俺に顔を近付けて聞いてきた。

「レイン、「あ、嗚呼。凄く美味いぜ。毎日食べたいくらいだ。」

俺がそう言つとイエローの顔が赤くなつた
Why?

「今日の朝ご飯はイエローが作つたのよ。」

マジですかっ！？

倘若此处^さで美咲く作れなしそ

レインー将来は良いお嫁さんになるな、イエロー！・・・俺もこなんなお嫁さんが欲しいなあ。」

ପ୍ରକାଶକ

そんな感じで朝ご飯を食べた。

レイン「はあ・・・」

「何で溜め息吐いてんだ?」

赤い帽子を被つていて・黒のTシャツを着ていてその上から袖の部

分が白・それ以外は赤のシャツを羽織つており・青のズボンを着ている青年が俺に話し掛けてきた。

もう皆は分かるよな?

この世界の主人公の一人、レッドだ。
そして目の前には

「ピカアー！」

ピカチュウが俺達を睨みながら見ていてます

原作介入しちゃったよ。」

N o . 7 電氣ネズミがいたよ・・・(後書き)

次回はピカチュウをゲットする話です

その前に回想するんですけどね・・・

次回もお楽しみに!!

No.8 バルカチュウ（前書き）

前話を少し修正しました

今回はピカチュウの話です

誤字・脱字などがあれば教えてください

No.8 ヴサルカチュウ

s.i.d.eレイン

はあ、何でこうなったのかなあ？

思い出せ、レイン！

落ち着け、レイン！

頭にある記憶を呼び覚ませ！

朝ご飯を食べ終わる

「ビシティに行くの序でにピカチュウを探す

赤い帽子・袖が白の赤い重ね着した服・黒のTシャツ・青のズボン
を着た青年と会つ

取り敢えず自己紹介をする

まさかのレッドー？

ピカチュウを探す

見つける

ピカチュウに睨まれている 今此処

・・・散歩したからじやん。o'ret

レッド「おー、どうしたんだよレイン？」

レッドが俺の肩に手を置きながら聞いてきた。

否、君のせいだからね！！

早くピカチュウを捕まえちゃってよ…

「ピィカ・・・」

ピカチュウの頬から電気が溢れていた。
あらら、随分と怒つてらつしゃる。

そんなに怒ると皺が増えるぞ…！

・・・ だから、皺が増えても大丈夫か

レイン「レッド、ピカチュウさんはかなりのお怒りだ。君の力でピカチュウさんを救つてやってくれんか？」

何で敬語で話さないのかと言つと、レッドが無理して話さなくとも
良いと言つてくれたからだ。

流石は主人公…！

心が広いなあ…！

お調子者だけど…・・・

レッド「了解…！頼むぜ、フシギダネ…！」

レッドは一つのモンスター・ボールを投げた。

そこから一体のポケモン・フシギダネが現れた

ピカチュウは、フシギダネを見て一瞬驚いたが直ぐに何時もの顔に
戻した。

・・・ あの顔はフシギダネを見下してる顔だな。
・・・ 涙いムカつくなあ。

まあ此処はレッドに任せるとか。

「ピカアツーーー！」

ピカチュウがフシギダネに“でんきショック”をした。

ドショーンッー！

ピカチュウの“でんきショック”がフシギダネに直撃した。

「あー、ダメなのか？」

二ビシティの人達が、諦めムードを漂わせていた。

否々、まだ終わっていないから。

フシギダネが簡単に負けるわけないから。

煙が晴れると、余りダメージを受けていないフシギダネがそこに居た。

「ピカツー！」

フシギダネの姿を見て、驚いていた。

・・・これで終わりだな。

レッド「それじゃあ次はこっちの番だなーーー！」

レッドがそう言つと、フシギダネの背中から一つの種がピカチュウに向かつた。

そして、その種から出た花粉？でピカチュウは眠つた。

レッド「それー！」

レッドは、眠っているピカチュウに近づいてモンスターボールを投げた。

そして、ピカチュウはレッドのポケモンになった。

・・・ふう、なんとか原作通り進んだな。

俺は安心した。

レイン「それじゃあなレッド。」

俺はそう言った。

レッド「何処か寄る所もあるのか？」

レッドは、一ビシティの人々に拍手されながら俺に聞いてきた。

レイン「嗚呼、少し寄る所があるからな。」

俺はそう言って歩きだした。

レッド「じゃあまた何処かで会おうぜー。」

レッドがそう言つてきたので、俺は手を上げ答えた。

俺は直ぐにポケモンセンターに向かった。

明日、一ジムに挑戦するためだ。

別に明日にでもポケモンセンターに行けば良いのだが、明日はポケモンセンターが口ケット団に襲われる。

なので、俺はレッドと別れポケモンセンターに向かった。

レッドに教える良かつたのだが、明日の試合でレッドとピカチュウの友情？が深まるので言わなかつた。

俺は、カントー・ジョウト・ホウエン・シンオウは回つたがジムに

は挑戦していない。

なので、明日からジムを回る予定だ。

まあ、明日のジム戦が終われば一度トキワシティに戻つて準備しないといけないんだがな。

さて、ロコンとラプラスに頑張つてもらうかー！

俺はそう思いながらポケモンセンターに向かつた。

No.8 バルカチュウ（後編）

次回は「ビジムに挑戦する話です

お楽しみにーー！

20・9　「レジムに挑戦しよう（前書き）

地域野球に参加したので、凄く体が怠いです

今日は「レジムに挑戦するまでの話です

誤字・脱字があれば教えてください

N.O.9 ニュージムに挑戦しよう

s.i.d.e レイン

レイン「ん・・・んんー！・・・よくねた。」

俺はベッドから上半身を起いこ、固まつた筋肉を解してそう呟いた。

俺は時計を見た。

午前五時五十八分四十九秒

うん、何時も通りだな。

俺は近くの宿で部屋を借り夜を過いこした。

本当にこの世界は凄いよ。

俺みたいな奴でも、部屋を借りる事が出来たんだからな。
まあ、旅をしている時は流石に何度も度が追い出されたがな。
今日はニビジムに挑戦する日。

昨日のうちにポケモンセンターに行つた。

対策も考えた。

後は予選を勝ち上がつて戦うだけだ！！

俺はベッドから出て、黒の半袖のTシャツを着て、グレーのジーパンを着た。

まあ地味なんだけど、シンブルイズベストって言葉があるからそこ

の所は気にしない。

俺はモンスターボールが付いたベルトを腰に巻いた。
さて、そろそろ行きますか！！

俺はニビジムに向かつた。

勿論、お金を払つたぜ。

お金は・・・うん、旅で稼いだお金があるから余裕だぞ。

まあ今持つている金額は・・・中古の単車の車が買える位の金額を持つている。

・・・何かすまないな。

俺はニビシティイを探索している。

何故なら、余りにも早くニビジムに着いてしまったからだ。
ニビジムの予選が始まるのは午前八時から。

今の時刻は午前七時五十分ぴったり。

後十分あるわけ。

なので、俺はニビシティイを探索している。

そうだ、さつきポケモンセンターを見てきた。

やはり原作同様、破壊されていた。

まあ俺は昨日の内にポケモンセンターに行つたから問題はない。
俺がニビシティイを探索していると、前から誰かが歩いてきた。

ニビジムの挑戦者か？

俺は目を凝らして歩いてくる奴を見た。

「・・・・・」

・・・ビックリー

まさに目から鱗だ。

目の前から茶髪のツンツン髪・紫の長袖の服・黒のジーパン・茶色の靴・少し変わったペンダントを掛けている少年、グリーンが来た
からだ。

此処に来てまた原作キャラヒョンカウントなんて・・・。

グリーン「おい、何で俺を見て落ち込んでんだよ。失礼にも程があるだろ。」

グリーンが俺の前に来て、そう言つてきた。
確かにそうだよな。

初対面の奴に顔を見られて落ち込まれるのは、気分が良いとは言わないな。

謝らないとなー！

レイン「すいません。オーキド博士の孫であるグリーンさんと、ニビジムの予選と戦つてしまつと思いまして・・・本当にすいません。

」

俺は直ぐに立ち上がり、頭を下げて謝った。

今回は俺が悪い。

悪い事をしたら素直に謝る

これも俺が旅をして学んだ事だ。

まあこれは当たり前の事なんだけどな。

グリーン「・・・お前、名前は？」

グリーン・・・否、グリーンさんが俺の名前を聞いてきた。
レッドはため口で良いと言わたが、グリーンさんはまだその許可を得てないからな。

だから言い直した。

悪いな、さつきから口調が口ロロロと変わつて。

レイン「俺の名はレインボー、レインと呼んでください。」

俺は笑顔でグリーンさんに言った。

自己紹介の仕方がクリスタルみたいだったが、後悔はしていない。

グリーン「・・・お前もニビジムに挑戦するのか？」

グリーンさんも挑戦するんだったよな。

・・・予選で当たつたらどうしようか？

原作通り進めたいから、もしグリーンさんヒッシュと戦う事になつたら棄権でもするか。

レイン「そうですよ。予選で当たなければ良いですね。」

俺はそう言つたが、グリーンさんは鼻で笑つた。

・・・カツチーンときたが、俺は大人だから水に流してやるつーーー。皆は忘れてるかもしねえが、俺は転生者だ。だから、精神年齢はグリーンさんより上だぞ！

グリーン「精々無様な負け方はするなよ。」

グリーンさんはさつ言つて一ビジムに向かつて歩いていった。

・・・こーになれ、こーになるんだ。

ロココン『あいつは絶対に許さないーーー。』

ラプラス『久々に僕も切れたよーーー。』

バンギラス『レインとの実力の差も分からぬ青一才のくせに舐めた口を利きやがる。』

ボーマンダー『俺があいつの自信を粉々にしてやるーーー。』

ルカリオ『レイン、彼と戦う時は僕に戦わせてよ。』

グレイシア『ダメですーー私が彼と戦いますーーレイン君、私に戦わせてくださいーー彼に絶望を見せあげますからーー。』

否、皆勘違いしてるから。

戦うのはグリーンさん本人じゃなくて、グリーンさんのポケモン（、
、、）だから。

それに、今はあんな性格だけど将来は良い性格になるから。
だから、今は我慢しないと。

・・・・待てよ、グリーンさんが一ビジムに向かつたって事は受け
付けは始まつてんじゃね？

レッドみたいにギリギリ参加はしたくないから、早めに行つとくが。
レイン「取り敢えず、今日はロココンとラプラスで行くから。他の皆
は我慢してくれ。」

全員『分かった（分かっただぜ）（分かったよ）（分かりました）』

皆は素直に返事をしてくれた。

お兄さん、素直な子達は好きだぞ！
like だがな・・・

レイン「さて、頑張りますかー！」

俺は一ビジムに向かつて歩きだした。

20・9　「レジムに挑戦しよう」（後編）

次回は「レジムの戦い」の話です

次回もお楽しみに！

No.10 ヴィアローン（前編）

初のポケモンバトル！！

ちやんと眺めんに悩むるかどうか、凄く不安です・・・

誤字・脱字があれば教えてください

sideレイン

レイン一ラカラス、“ハイドロポンカ”！！

ラプラス『分かつたよ！！』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従つて“ハイドロポンプ”を放つた。

バツシャ——ン！—！—！

ラプラスが放つた“ハイドロポンプ”は、相手に直撃した。すると相手は、目を回しながら倒れた。

「ワンリキー、戦闘不能！－ラプラスの勝ち－－よつてレイン選手、決勝戦進出決定！！」

審判は俺の方に旗を上げて、そう宣言した。

分からぬ人の為に、一応説明しとくぜ。

俺は今、一ビジムの予選の準決勝に勝った所だ。

た。

俺は直ぐに予選にエントリーし、ロコンとラプラスを交互に使って予選を勝ち上がつていった。

俺は運が強かったのか、此処までレジとコーヒーをひさびさに当たる事は無かつた。

・・・運が良くてマジで良かつた。

そうそう、俺が準々決勝時、隣のリングでレッドが戦っていた。レッドのポケモンは、HPが見ただけで分かる位残つていなかつた。やはり原作通り、レッドは昨日の内にポケモンセンターに行つてなかつたと推測出来る。

だが、レッドはHPの少ないフシギダネで一撃で敵ポケモンを倒していた。

原作通りなら、フシギダネとレッドのもつ一体のポケモンであるニヨロゾのHPは限界だろつ。

「マサラタウンのレッド君！ 決勝戦進出決定！！」

アナウンスが聞こえた。

無事に決勝戦まで勝てたのか・・・

だけど、もうフシギダネとニヨロゾは無理だろつ。ピカチュウが原作通りの行動を起こしてくれれば良いが・・・

「レイン君！ 第二リングへ向かってください。決勝戦を始めます！」

おっと、俺の決勝戦のようだな！！

俺は口コンが入ったモンスター ボールを腰から外して、俺の顔の前まで持つてきた

レイン「口コン、準備は良いか？」

口コン『勿論だよ・・・だけど、アイツと戦えなかつたのは残念だつたな。』

口コンが言つたアイツとは、多分グリーンさんの事だろつ。俺としては、戦わなかつたので安心してるんだけどな・・・

レイン「ま、頑張りますか！！」

ロコーン『うんー』

俺は急いで第一ーリングに向かつた。

タケシ「お前がレインボーか？」

俺と向かい合わせに立つてゐる人物・ニビジムのジムリーダーのタケシさんが聞いてきた。

俺はゆっくり頷いた。

タケシ「お前達の勝負、凄いの一言に尽きる。だが！俺もニビジムのジムリーダー！全力でお前と戦おう！！使用ポケモンは一体・相手のポケモンを倒せば勝ち。分かつたか？」

レイン「嗚呼。」

俺がそう言つと、タケシは笑つた。

全力で戦う相手に、手加減して戦うのは失礼にも程があるな。
こつちも全力で戦つて、そして勝つ！！

タケシ「行け、ゴローンー！」

レイン「頑張れ、ロコーンー！」

タケシさんはゴローンを・俺はロコーンをリングに出した。

タケシ「相性はゴチラが勝つてるぞ。」

レイン「それくらい分かってるよ。」

タケシさんの言つ通りロコンのタイプは火、それに対しゴローンのタイプは岩・地面

相性はロコンの方が最悪だ。

だが、ポケモンバトルは相性だけが勝負を決めるものじゃない……！

タケシ「そうか……ゴローン、『転がる』……！」

タケシさんは、ゴローンに“転がる”を指示した。
するとゴローンは、ロコンに向かって転がってきた。

・・・甘いな。

レイン「ロコン、『影分身』……！」

ロコン『分かったー！』

俺はロコンに指示を出すと、ロコンは直ぐに“影分身”を発動させた。

ロコンは二十体の“影分身”を作つて、ゴローンを焦らせた。
狙い通り、ゴローンはどのロコンを攻撃したら良いのか分からなくなつて混乱していた。

レイン「ロコン、『日本晴れ』……！」

俺がそう指示を出すと、リングの上に擬似太陽が現れた。

本来はこんな風にはならないのだが、俺達が修業して建物の中でも

“日本晴れ”が出来る様にした。

タケシ「ば、バカな！？建物の中で“日本晴れ”が出来るなんて！？」

タケシさんは、リングの上にある擬似太陽を見ながらそう言った。
普通は出来ないよ。

俺達が異常だから、こんな事が出来るんだから。

・・・さて、下準備を整った事だし、そろそろ決めるか！！

レイン「ロコン、ソーラービーム」――

ロコン『了解』

俺がロコンに指示を出すと、ロコンは“影分身”をしながら“ソーラービーム”的エネルギーを溜め始めた。

タケシ「や、ヤバい！――」ロコン、全てのロコンに“メガトンパンチ”だ――

タケシさんは、ロコンに指示を出すが、もう間に合わない――

レイン「ソーラービーム、発射！」

俺がそつひとつ、ロコンは、ロコンに“ソーラービーム”を放った。

ドッカ――ン――！

“ソーラービーム”がゴローンに直撃すると、大きな爆発音が響いた。

そしてゴローンは、目を回しながら倒れた。

一応説明しどくぜ。

“ソーラービーム”は本来、エネルギーを溜めるのに時間が掛かる。だが天候が“日照り状態”だと、エネルギー溜める時間は殆ど掛からない。

なのでロコンは、時間を掛けずに“ソーラービーム”を放てたわけだ。

「！」、『ゴローン、戦闘不能！』ロコンの勝ち！よつて勝者、トキワシティのレインボー！

審判は、驚きながらも旗を俺の方へ上げた。

ウワアアアアアアアア！！！！

物凄い歓声が、ジムに響いた。

俺は口コンを撫でて、モンスター・ボールに戻した。
するとタケシさんが、ゴローンをモンスター・ボールを戻して俺の前に来た。

タケシ「凄い試合だつたよ。君みたいなトレーナーも、世界には沢山居るんだな。勉強になつたよ。」

タケシさんは、頬笑みながら俺に言つてきた。
俺も、タケシさんに頬笑みながら「世界は広いですか？」と言つた。

するとタケシさんは、審判から何かを受け取つて俺に渡してきた。

タケシ「ジムバッヂだ。受け取ってくれ。」

俺はタケシさんからジムバッヂを受け取つて、（自作の）バッヂケースに入れた。

服に付けても良かつたんだが、どつかの泥棒さんに奪われるのは面倒なので（自作の）バッヂケースに入れた。

タケシ「また、俺と戦つてくれないか？」

タケシさんは、俺に手を出して聞いてきた。
そんなの、答えは決まってる…！」

レイン「良いともー！」

俺はタケシさんの手をがつちり握つて、そう言つた。
俺の最初のジム戦は、俺の勝利で幕を閉じた。

そうそう、言い忘れていたが、レッドとグリーンさんも無事にバッヂを手に入れた。

グリーンさんの戦いは観ていないが、レッドの戦いはちゃんと観たぜ。

やはり原作通り、レッドはピカチュウを体を張つて護つた。
そしてその想いが届いたのか、ピカチュウの一撃でタケシさんのイワークが負けた。

さて、今日は疲れたから宿に泊まって明日トキワシティに帰る。

俺はそう想いながら、宿に向かった。

No.10 バス停ローン（後編）

次回はトキワ・シティに歸る話です。

次回もお楽しみにーー！

2.0・1.1 また旅に出かけたり思つ（漫畫セ

今更ですが、レインの持ち物について

ポケギア

タウンマップ（カントー～シンオウまで）

スケッチブックと鉛筆と消しゴム（自作のポケモン図鑑）

財布とお金（中古の軽自動車が買える位の金額）

服と下着（一着ずつ）

バッヂケース（自作）

これ位かな？

話の展開は何時も通り、急です

誤字・脱字があれば教えてください

s.i.d e レイン

「ジムのジム戦の翌日……

レイン「フウ……無事に勝つたんだよな。」

俺は荷物を纏め、鞄に詰めながらバッヂを見て俺はそう呟いた。
これから、もう一度カントーを回ってジムに挑戦する。
まあ決めたのは良いんだけど、イエローに何て言おうか……
また旅に出るって言つたら、どんな反応をしてくれるだろ?少し、少しだけ考えてみよつ……

パターン1

笑顔で送り出してくれる

イエロー「えつ、また旅に出るの?……レイン君が決めた事だからじょうがなによ。頑張つてね!」

パターン2

泣いて俺が旅に行くのを拒む

イエロー「えつ、また旅に出ちやつのー?……いやだよ、せいかくかえってきたのに……またあえなくなるなんていやだよー!」

・・・この一通りしか思い付かないが、出来ればパターンーの反応をしてほしい。

イエローの泣き顔を見るのは辛いな・・・

神様お願い！！

イエローがパターンーの反応をしてくれます様に！・・・

神様『それは無理じや。』

頭の中に、俺を転生させてくれた神様の声が聞こえた。

例え神様が俺を見捨てたとしても、俺は最後の最後迄諦めない！！

・・・イナズマイレブンの今日の格言だな、最後の言葉は。使つた事に反省はしないが後悔もしない。

・・・言つ必要があつたのか、この上の言葉は？

神様『速く逝つてぐるんじや！・・・』

行くつて言つ字が違つよ、神様！！

俺は逝かないから！・・・

レイン「取り敢えず、勇気を出して帰ろう。」

俺は鞄に荷物を全部詰め込み、鞄を背負つて宿から出た。言い忘れていたが、俺は昨日と同じ宿に泊まつたから。

レイン「それじゃあ、イエローの所に・・・逝こう。」

字が違うつて？

・・・気にしないでくれ。

イエロー「いやだよお…れいんくん、いかないですよ…」

イエローは俺に抱き付ながら泣いて俺に囁いている。

・・・やつぱパター^ン_ンだつたか！

クソッ、何でパター^ン_ンなのかな！？

神様に祈ったよ、俺！！

何故神様は、俺を見捨てるのかな！？

イエロー「おねがいだよお、もうビヨモいかないですよ。」

・・・余りやりたくないなかつたが

レイン「イエロー。」

ガバツ！！

イエロー「れ、れいんくん？／／／／／」

俺はイエローを抱き締めた。

はつきり言つて、俺が存在しなかつたらイエローは泣く事は無かつた。

だけど、俺と言つていレギュラーが存在する所為でイエローが泣いてしまった。

俺がイエローに出来る事は、イエローが幸せになる様にサポートす

る事。

それが、俺がイエローに出来る精一杯の行動だ。

レイン「イエロー？ もう一度と会えない訳じゃないんだ。俺は、カントーのジム全部に挑戦し終わったら、必ず此処に、イエローの所に帰ってくる。だから、もう一回だけ、もう一回だけ、俺を待っていてくれないか？」

俺が聞くと、イエローは黙つて頷いてくれた。

俺はイエローの頭を撫でながら「ありがとう」と言った。

そして、俺はイエローから離れた。

イエロー「あ…」

俺が離れるごとに、イエローは残念そうな顔をした。

Why?

まあ気付かずダメだと思つから、気にしないけどな。

レイン「それじゃイエロー、行ってくるよ。みんな

イエロー「…・無事に帰つてきてね？」

レイン「分かってるよ。」

俺はそうつられて、鞄をちゃんと背負い直しきだした。

イエロー「必ずだよお…」

俺は手を上げて返事をした。

全部のジムへ挑戦

ロケット団の野望の阻止及び壊滅

マグマ団・アクア団の野望を阻止及び壊滅

デオキシス・ジラーーチの保護

ギンガ団の野望を阻止及び壊滅

・・・関わりたくなかったが、原作キャラと接触しないといけない
な。

次に向かわないといけないのは、ハナダシティか・・・
オツキミ山を超えないダメだけどな。
レッドに追いかけると良いが！！
俺は走りだした。

20・11 また旅に出かけ思ひ（後書き）

次回はオツキミヨでの話ですね

レッヂとカスミと、上手く合流させたいなあ

次回もお楽しみにーー！

N O . 1 2 目指せハナダシティ！（前書き）

無事に書けた・・・

しかし、もう直ぐで夏休みが終わってしまつ・・・

なのに、夏休みの宿題が終わっていない

・・・マジでヤバい

誤字・脱字があれば教えてください

s i d e レイン

俺は今、オツキミ山を田指して現在進行形で全速力で走っている。あの後の事を簡単に説明すると、イエローと大切な約束をした後、俺はトキワの森をポケモンと出会わない様にしながら無傷でトキワの森を抜け、ニビシティで一息付いてからオツキミ山に向かって走っている。

原作通りなら、カスミさんのギャラドスを助ける話があつたよな？でも、さつき通った道に水溜まりが沢山有つたから、その話は既に終わつたのか？

だつたら、急いでオツキミ山の近くにあるポケモンセンターに行かないといと！！

俺は走るスピードを速めて、レッドが居るであろうポケモンセンターに向かつた。

レイン「ハア・・・ハア・・・や、やつと着いた。」

俺は息切れをしながらも、前にあるポケモンセンターを見ながらそう言った。

さて、中にレッドは居るのだろうか？
俺は呼吸を整えながらポケモンセンターに入ろうとした。
そしたら、ポケモンセンターの扉が開いた。

レッド「あつ・・・・レイン！お前の力を貸してくれないか？」

中から、レッドと一人の女性がポケモンセンターから出てきた。

多分、この女性がカスミさんだろ？。

しかしひどく、急に力を貸せつて、どうよ？

まあ別に良いけどさ・・・

レイン「別に良いけどさ・・・でも、俺はオツキミ山に行くぜ？」

レッド「嗚呼、俺達もオツキミ山に向かおうと思つてたんだ。なあ、カスミ？」

カスミ「ええそりよ。私はカスミ。貴方はレイン君ね？」「うしく。

カスミさんは俺の前に手を出してきた。

俺はカスミさんの手を握った。

レイン「よろしくお願ひします、カスミさん。」

レッド「挨拶は済んだな？それじゃあオツキミ山へ急いでござー！」

レッド、落ち着けって。

そんなに急がなくてもオツキミ山は逃げないから。

あつ、でも口ケット団は急がないと居なくなるか・・・

俺は一人で自問自答しながら、レッドの後を追掛けた。

レッド「・・・あれが口ケット団。マサラタウンにも、アイツ等が
居たぞ。」

レッドは、前に沢山居る口ケット団を見ながらそう呟いた。
俺達はあの後、オツキミ山の入り口に来た。

だが、ロケット団が沢山居たので俺達は現在進行形で草陰に隠れながらロケット団の様子を伺っている。

「何としても“月の石”を見つけだすんだ！！」

ロケット団の下っぱの一人が、仲間の下っぱに聞こえる様に言った。
さて、何処かにオツキミ山に入る入り口があつたよな・・・
探さないと・・・

レッド「お~い、コッチに入り口を見つけたぞ。」

レッドが俺達にしか聞こえない位の声で、俺達にそう言つてきた。
・・・レッド、少しほ冷静に動こうと思わないのか?
まあ別に良いけどさ。

俺達はレッドが見つけた入り口に入つていった。

No.12 目指せハナダシティ！（後書き）

次回はロケット団と初のバトル！！

次回もお楽しみに！！

N.O.・13 VSサイボーン（前書き）

今更ですが、ポケモンって一体何個迄技を覚えて良いのでしょうか？

ゲームみたいに4個？

- ・でも、ポケスペやアニメのポケモンは4個以上の技を使つてゐる・

何個迄覚えをせても良いですか？

教えてもらひると凄く嬉しいです

後、今回は余り戦闘の話はありません

誤字・脱字があれば教えてください

s i d e レイン

俺達は今、レッドが見つけたオツキミ山の洞窟の中を歩いている。
しかし・・・前が見えない。

カスミ「これじゃ・・・何処を歩いているのか分からぬわね。」

俺の前を歩いてくるカスミさんが、俺とレッドに聞こえる様に言った。

確かに目の前が見えない暗さで、洞窟を歩くのは危険過ぎる。
でも、俺の手持ちの中に洞窟を明るくする技・“フラッシュ”を覚
えてるポケモンは居ないんだよな・・・
まあ口ロンの“日本晴れ”を使えば良いのだが、あれは酸素を激し
く消費するので洞窟の中で使つと酸欠で倒れてしまつ危険性がある
から使えない。
さて、どうしたものか・・・

レッド「出で!」

俺が考へてると、レッドがピカチュウをボールから出した。
そう言へば、原作ではレッドのピカチュウが洞窟を明るくしてたな・
・
しかし、ピカチュウの機嫌が悪過ぎるや。

カスミ「機嫌・・・悪やつね。」

俺の思つた事を、カスミさんがピカチュウを見ながら言つた。
うん、ホントに機嫌が悪いよ、このピカチュウ・・・

レッド「最近捕まえたポケモンだからね……でも、実力はお墨付
れわ。」

レッドがそう言つと、ピカチュウが“フリッシュ”をして洞窟が明
るくなつた。

実力はお墨付きだけじゃ、少しほらおひよ。
俺は心の中でレッドに突っ込んだ。

カスミ「レイン君、貴方つてポケモントレーナーなのよね？」

暫く洞窟を歩いていると、カスミさんが突然俺に話しかけてきた。

レイン「ええ、俺もポケモントレーナーですよ。今はカントーのジ
ムを制覇する為に旅をしています。」

俺がそう言つと、カスミさんは驚いた顔で俺を見てきた。

・・・俺みたいな小さい子供が、ジムを制覇する為に旅に出るのが
そんなに珍しいのだろうか？

まあ、ホウエンやシンオウを旅している時は、よく警察による世話に
なつてたなあ・・・

迷子や家出・拳げ句の果てに誘拐された子供などと言われ、何度も警
察署にお世話をになった事やら・・・

あ、あれ？

目から汗が出てきたなあ・・・
な、何で？

カスミ「え・・・と、ごめんね、何か思い出したくない事を思い出

させひやつて・・・

カスミさんが俺にハンカチを渡して、俺に謝つてきた。
チクショウ、今の俺の精神年齢は大人なのに・・・
俺は、カスミさんから渡されたハンカチで目から出でてくる汗を拭いた。

な、涙じゃないからな！！

そこ所を聞違え無いいでくれよ！！

レッド「ウワツー？」

突然、前を歩いていたレッドが尻餅を付いて倒れた。
俺とカスミさんは、レッドの隣に立つて目の前に居る岩の様なポケモン・サイホーンを睨み付けた。

「貴様等、外の入り口は完全に塞いでいた筈だ・・・どうやって入つた？」

ポケモンの陰からロケット団が沢山出てきて俺達を囮んで、その内の一人が俺達の前に立つて聞いてきた。

・・・コイツ、確か何処かのジムリーダーだったよな。

レッド「答える必要は・・・ねえぜ！勝負ー！」

レッドはそう言つと、レッドのピカチュウはロケット団のサイホンに身構えた。

・・・俺も戦う準備をしておこづ。

ラプラス、今回はお前の力を借りるぞ。

ラプラス『（分かったよ、レイン）』

俺はラプラスのボールを腰から取り出して、トキワの力を使ってラプラスと言葉を発せずに会話をした。

「サイホーン、『落とし』！」

するとロケット団のサイホーンが、レッドのピカチュウに“落とし”を放った。

するとレッドのピカチュウは、岩に埋められたが直ぐに出てきて、電気で集めた砂鉄を固めた物をサイホーンに放つた。

レッド「俺のピカチュウは、聞き分けは悪いが強いぜー。」

レッドは、ロケット団を見ながらそう言った。

レッド、それは威張る事なのか？

しかし、ピカチュウの攻撃のお陰でサイホーンを倒す事が出来た。

「全く、しょうがないガキ共だ・・・」

するとサイホーンを操っていたロケット団の奴が、注射針を取り出してサイホーンの横に行つた。

すると注射針をサイホーンに注射した。

「ロケット団に歯向かうとどうなるか・・・」

するとサイホーンの怪我は一瞬にして治り、サイホーンがサイドンに進化した。

・・・コイツ等、進化させる薬を作るのに、一体どれだけのポケモンを・・・

・・・絶対にハイツ等、壊滅されちゃる――

No.13 VSサイボーン（後書き）

次回はレイン無双の話（を予定しています）

次回もお楽しみにー！

N・14 VSサイドン（前書き）

ポケモンの技は最大八個迄覚えるが、バトルフロンティアなどの施設に参加する場合は事前に八個の中から四個選ばなければならない

そして、マシン技はマシンを使わないと覚えれない
人に教える技も、教えてもらわないと覚えれない
タマゴ技はレベルアップで稀に覚える可能性がある

覚えたての技は、威力や命中率が落ちたり反動があつたりする

これがこの小説の大まかな技についてですね

詳しく述べます

後、今回から地の文の書き方を変えたので、以後はこの書き方で進めていくのでよろしくお願いします

誤字・脱字があれば教えてください

No.14 VSサイドン

s.i.d.eレイン

俺達の田の前には、人工的に進化させられたサイドンが居る。コイツ等、どれだけのポケモンを犠牲にしてこの薬を作り上げたんだ……

カスミ「ま、まさか貴方達、私のギャラドスにもそれを……？」

カスミ「さあがサイドンを見て、怒りと不安の感情が籠もった顔で口ケット団に聞いた。

するとサイホーンをサイドンに進化させた男が、間抜けな顔をしながら俺達を見てきた。

「ん～～～！？何だつて？実験はそこいら中でやつたからな。一々覚えちゃおれん！」

ブチッ！！

俺は口ケット団の言葉を聞いて、俺の中にある何かが切れた。

カスミさんはその言葉を聞いて完全に怒り、ボールからヒトデマントを出してサイドンに攻撃し始めた。

サイドンはカスミさんに任せて、俺は俺達少し後ろで殺氣を放っている奴等を倒すとしよう。

俺は後ろに歩いていって、田の前に大量の口ケット団の下っぱ達が現れたので横にラプラスを出して、口ケット団の下っぱ達に指を指した。

レイン「ラプラス、ロケット団の下っば達に“ハイドロポンプ”」

ラプラス『分かつた!』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従つて口ヶツト団の下っぱ達に“ハイドロポンプ”を放つた。

デッキマーク――ノ・・・・・・

ロケット団の下っぱ達は、ラプラスの“ハイドロポンプ”を喰らつて悲鳴を挙げて倒れていった。

すると突然、大量の水が俺達の所に向かってきた。

俺はカヌーさんを井ヤツチしたが勢いを殺す事が出来

叩きつけられた。

レイン「イテテテ……な、何でカスミさんが飛んで来たんだ？」

俺はよく分からなかつたので、田を瞑つて原作を思い出そうとした。

確かに、ヒトデマンの攻撃でサイドンが劣勢になっていたが、サイドンの“角ドリル”でヒトデマンの攻撃を跳ね返されて……！？

レイン「レッドがヤバい！－ラプラス、今直ぐレッドの所へ行へぞ」

俺はせつまつてカスミさんをラプラスの背中に乗せて、走ってレッド達の所へ向かった。

俺達がレッドの所へ戻ると、レッドのピカチュウがサイドンに踏み付けられていた。

ピカチュウが原作通りに倒すのは分かっていても、一対一になつて卑怯になつても、黙つて見ていられる訳無いだろーー！

レイン「ラプラス、サイドンの頭に“冷凍ビーム”ーー！」

ラプラス『分かつた！』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示通りサイドンの頭に向かって“冷凍ビーム”を放った。

不意打ちの“冷凍ビーム”的所為で、サイドンは一瞬茫然だ。

レイン「今だ、レッドーー！」

レッド「分かつたーー頼む、ピカチュウーー！」

レッドがピカチュウに叫ぶと、サイドンの足元からピカチュウが現れて、電気の帯びた尻尾で上にある岩に向かつて弧を描く様に攻撃した。

「ワハハハーー！何処を狙っているーー！」

サイドンを使っていた口ケット団の男がピカチュウを見ながらそ

う言つと、ピカチュウは岩に電気を流した。

すると岩が突然、地面に落ちてきた。

ロケット団せ、岩を避けの為に奥に逃げていった。

ドッカ――――ン！！！！

そして岩が落ちてきて、俺達とロケット団は完全に二手に別れた。

その後、レッドが月の石を拾つていて、カスミさんをレッドにおぶさせて、俺達はオツキヒヨの出口に向かつて歩きだした。

その途中、俺が倒したロケット団の下っ派達を見てレッドが驚い

No.14 VSサイドン（後編）

次回はカスミの家でパーティーをする話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.15 一時のパーティー（前書き）

……パーティーの話は全然少ないです

……これと書いて書く事も無いし……

誤字・脱字があれば教えてください

s.i.d.e レイン

レッド「おっ……やつと出口が見えてきた……」

レッドの言つ通り、田の前に外の光が洞窟の中に差し込んでいた。俺達は体中泥だらけになりながらもオツキミ山の出口に歩いて、漸くオツキミ山を抜け出す事が出来た。

レイン「よ、漸くオツキミ山を抜け出す事が出来た。」

カスミ「うーん……うは……うへ。」

俺がオツキミ山を抜けて背伸びをしながらそつまつと、レッドを背負っていたカスミさんが目を覚ました。

目が覚めたカスミさんは、自分の体を見て驚いた顔をした。

カスミ「ちょっとー何で泥だらけな訳ー？」

レッド「え？」

カスミ「イヤーー何処触つてんのよ、スケベーー！」

レッド「グハツー！」

カスミさんが、自分の体が泥だらけな事を驚いた時、レッドの手がカスミさんの体の何処かを触つていたので、カスミさんはレッドを力一杯殴り飛ばした。

レッド、今は流石にお前が悪いぞ。

もう少し女性を丁寧に扱わないと……

まあ言わなかつた俺も悪いけど……

そして何事も無かつた様に、一人はハナダシティに向かつて歩き出した。

……気にしちゃダメなんだら。

だから、俺は気にしない、否、気にしちゃいけない。

レッド「ちえつー俺の活躍を見せたかったぜ。いつやつて敵を食い止めてだな……。」

レッドが歩きながら、あの時の戦いをカスミさんと白腫し始めた。
……俺が介入しなかつたら、レッドのピカチュウは負けそうだったよな?

この世界は原作と違つ……否、俺が居たからあんな風になつただけだ……。

俺がそう思つてると、カスミさんがオツキニ山を何か悔しそうに見ていた。

カスミ「それにしても……、惜しかつたね月の石……。」

カスミさんがそう言つと、レッドは笑いながらポケットからある物を取り出して、カスミさんに見せた。

カスミさんは、レッドが見せてきた物を見て驚いた顔をした。

カスミ「ああー?」

レッド「洞窟が崩れた時、偶然見つけちゃつたもんね~!」

レッドはそう言つて、ハナダシティに向かつて走りだした。

俺とカスミさんは、レッドを追い掛ける為に走りだした。

.....
.....
.....

俺達はハナダシティにやつてきた。

そして俺とレッドは、この町の出身のカスミにハナダシティを案内してもらつてゐる。

暫く歩いてると、カスミさんが豪華な屋敷の前で立ち止まつた。

カスミ「さあ着いたわ。」

レッド「うわあっーーー！」これ全部君ん家、？」

カスミ「やうよ。」

レッドは大声を出して驚きながらカスミさんに聞くと、カスミさんは笑顔でレッドの言葉を肯定した。

俺は顔には出していないが、内心ではかなり驚いていた。

俺とレッドが驚いていたら、屋敷から沢山のメイドさんが走つて來た。

「「「お帰りなさいませ、カスミ様！－！」」

俺とレッドは、メイドさんの余りの多さに呆氣を取られた。
するとメイドさん達が、カスミさんの泥だらけの姿を見て驚いていた。

「まあ……！カスミ様、何でお姿に……？」

カスミ「まあね……。あつ！紹介するわ、新しい友達のレッドとレイン君よ。」

カスミさんが、メイドさん達に俺達の事を紹介してくれた。

レッド「おす。」

レイン「よろしくお願ひします。」

俺とレッドはメイドさん達に挨拶をして、カスミさんの屋敷に入つていった。

た。

レイン「あ、嗚呼。」

俺も動搖しながらレッドに応えた。

すると扉から、ドレスを着たカスミさんがやつて來た。

カスミ「お待たせ、レッド、レイン君ー！」

……スゲエ、女人って服が変わるだけで印象が変わるんだな……

レッド「ヒュ～！“馬にも衣裳”とほいの事だぜー。」

レッドがカスミさんを見てやつした。

……レッド……

レイン・カスミ「“馬子にも”……（でしょ）ー。」

俺とカスミさんは、声を揃えてレッドに突っ込んだ。

その会話を聞いて、沢山のメイドさん達が小さい声で笑いだした。

カスミ「あ、食事にしまじょー。」

カスミがやつしたので、俺達は席に座った。

No.15 一時のパーティー（後書き）

次回はレッドが襲撃される話・レインがカスミと特訓する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.16 僕は修業、レッドは襲撃（前書き）

木曜日からテストなので、もしかしたら次回は更新出来ないかもし
れません

御了承ください

誤字・脱字が在れば教えてください

N.O.・16 僕は修業、レッドは襲撃

s.i.d.e レイン

レッド「……でも、カスミは早々に気を失っちゃって、頼れるのは俺だけだ……。」

レッドが料理を食べながら、今日のロケット団の戦いの事をメイドさんに自慢していた。

カスミさんは不機嫌そうに、俺は無言で料理を食べ続けた。
……しかしレッド、今日の戦いは俺が居なかつたら負けてたかもしれないぞ。

俺はそう思いながらレッドを見て料理を食べ続けた。

あつ、この料理、凄く美味しい……

後でメニューを貰えるか聞かないと……

レッド「ロケット団を相手に、俺の大活躍と来たら……。」

カスミ「……ちよつとレッド、食事が済んだら話が在るんだけど……。勿論、レイン君にも……。」

するとカスミさんが突然、真剣な顔をして俺とレッドに向ひて言った。
「特訓のお誘いだらうか?」

レッド「何だよ?煩いなあ、もう一良い所なのに……。」

だがレッドはニヤニヤ顔をしながら、カスミさんの顔を見ずにメイドさんと話し続けた。

レッド、話しつけられたら相手の顔を見ようぜ……

そのレッドの態度を見てカスミさんは少し苛立つたが、直ぐに真剣な顔をして話し始めた。

カスミ「もう直ぐしたらポケモン達の回復も済むわ。そうしたら、早速今晚からでもロケット団に対抗する特訓を始めようと思つの。」

……やつぱり、特訓のお誘いだつたか。

まあ、特訓は何度やつても損は無いからな……

レッド「特訓?」

レッドが?マークを頭に浮かべながら、カスミさんの顔を見た。レッドが顔を動かしたので、カスミさんはさつきより真剣な顔をして話しだした。

カスミ「ええ、オツキミニ山で出会つた奴等が首領格とは思えないでしょ。彼等より強い敵が、まだまだ居る筈だもの。」

カスミさんは握りこぶしを作つて、俺達に力説してきた。
俺はカスミさんに頷いたが、レッドは余裕そうな顔をした。

レッド「必要ないよ、そんなの。」

レッドがそつまつと、カスミさんは驚いた顔して、俺はレッドの顔を見ながら溜め息を吐いた。

カスミ「……………ど、とおして…?」

カスミさんは立ち上がり大きな声を出してレッドに聞いた。

レッド「俺の実力が在れば、あんな奴等、敵じやないつて事…」

……ホント、この頃のレッドって自信過剰だよな……

レッドの言葉を聞いたカスミさんは、呆れた顔をしてレッドを見た。

カスミ「敵は強大よー思い上がらない方が良いわ！」

カスミさんがレッドに忠告するが、レッドは面倒臭そうな顔をした。

レッド「しつこいなあ。やられて氣絶してたのは、自分の方の癖に……。」

れ、レッド、その事は……！

カスミ「バカ……！」

カスミさんは目に涙を溜めて大声でレッドに言った。
あ～、その事はタブーだったのに……

カスミ「レイン君ー行くわよーー！」

レイン「あつ、はい。」

カスミさんにそう言わされたので、俺は素直にカスミさんに付いて行つた。

レッド「……な、何だよ。泣く事ねーだろーー！」

レッドがカスミさんにやつしたが、カスミさんはレッドを無視して歩いて行つた。

……
……
……
……

カスミ「それじゃあレイン君、貴方のポケモンを見せてくれる?」

レイン「分かりました。」

俺はカスミさんこそう言われたので、俺はロココンとラプラスを出した。

俺達はあの後、動きやすいジャージに着替えて、ポケモンを受けて近くの公園にやつて來た。

レッドは、メイドさんとデートの約束をしていたが、……

カスミ「レイン君のポケモンって、それだけじゃないでしょ?」

レイン「そうですよ……。でも、俺はこの二体をメインに戦つてますから。」

未だ、ホウエン地方のポケモンですら知られてないのに、ボーマンダ以降のポケモンを見せる訳にはいかない。

なので俺は、仕方がなく嘘を言つた。

俺がそう言つと、カスミさんは何故かは分からぬが納得してくれ

れた。

カスミ「ポケモンの育て方は人それぞれ。それに、このロコンとラプラス、よく育てられてるわ。」

カスミさんはロコンとラプラスに近付いて、一體を撫でながら誉めてくれた。

ロコン『レイン、この人、凄く見る目が在るよーー。』

ラプラス『誉められると嬉しいな。』

ロコンとラプラスは、カスミさんを見ながら俺に言つてきた。

カスミ「しまった！レイン君を特訓に誘つておいて、私がポケモンを持つてくれるのを忘れた！！直ぐに持つてくれるね！！」

カスミさんはそう言つて、走つて屋敷に向かつて行つた。

……うん、レッドを襲撃しに行つたな。

えつ？

何で分かるかつて？

だってカスミさん、此処に来る前にちゃんとメイドさんからポケモンを預かつてたもん。

まあ、この襲撃にはちゃんと意味が在るから、邪魔はしないけどな……

俺は公園のベンチに座つて、カスミさんが戻つてくるのを待つた。

side レッド

俺はメイド達からポケモンを受け取り、自分の部屋に在るベッドに俯せになつて転がつている。

カスミとレインは、速くにポケモンを受け取つて特訓しに行つたらしい。

.....

レッド「ちょっとここで過ぎたかな？」

.....

俺は枕に置いてある畳に話し掛けた。
皆は、顔を傾けて頭に?マークを浮かべていた。
別に知らなくても良いか.....

レッド「ま、良いや。特訓なんてしてられもんね。それに明日は、メイド達とテートの約束をしちゃったしね」

俺は笑顔になつて、さつきのメイド達の約束を思い出しながら畳に言った。

フツ

レッド「ー?」

すると突然、部屋の電気が消えた。
停電.....かな?

「オー！」

レッド「うわーな、何だ！？」

すると突然、嵐の様な風が俺の部屋に吹き荒れた。
俺は突然の事だったので、どうする事も出来ずに嵐に巻き込まれた。

レッド「うわあああっ！た、助け……。」

俺が嵐に巻き込まれて助けを求めるが、フシギダネがボールから
出て“蔓の鞭”で俺を嵐の中心に引っ張ってくれて助けてくれた。
そして俺とフシギダネは、荷物に当たらない様に体を縮めた。
すると誰かが窓の外に行き、嵐は無くなつて静かになつた。
俺は立ち上がり電気を付けて、開いていた窓の外を見た。

レッド「はあ……はあ……行つたか……ん？これは……？」

外に出て行つた事を確認すると、俺の足元に“何か（・・）”が
在つた。

俺はその“何か（・・）”を拾つて、何なのかを確認した。

レッド「ギャラドスの……鱗だ。……でも、何でこれが？」

俺はそう呟いて、モンスター・ボールを拾つて、部屋を変えてもら
う為にメイド達の所に行つた。

side レイン

カスミ「ごめんね、ポケモン達が未だ回復してなくて、時間が掛か
つたんだ。」

カスミさんは俺の前迄走つてきて、申し訳なさそうな顔をしながら俺に謝ってきた。

……レッド襲撃は無事に出来たみたいだな。

レイン「別に良いですよ。それじゃあ、時間が余り無いので始めましょう。」

カスミ「そうねー。」

そして俺達は、眠たくなる迄一緒に特訓した。

No.16 俺は修業、レッドは襲撃（後書き）

次回はレッドとジム戦の話（を予定しています）

次回もお楽しみにーー！

No.17 俺はジム戦、レッスンは特訓（前書き）

今回少し話を見落しています

本当にすいません。これ

誤字・脱字が在れば教えてください

N.O.・17 僕はジム戦、レッドは特訓

s.i.d.e レイン

俺がカスミさんと一緒に特訓した・レッドがカスミさんに襲撃された日の翌日・・・

俺は何時も着ている白の半袖のカッターシャツに黒の長ズボンを着て、カスミさんの屋敷のメイドさんが作った朝ご飯を黙つて食べている。

レッドの周囲にはメイドさん達で一杯だが、レッドはフォークにワインナーを突き刺して顔の近くに持ち上げたまま何かを考え込んでいた。

多分、否、確実に昨日の襲撃の事を考えているんだろう。
まあそれは今は置いといて、俺のこれからについて考えないとな

レッドと一緒に旅をするのも良いが、それだとレッドのポケモン達が成長するフラグを俺が奪ってしまうし・・・

かと言つて、レッドと別れて行動したら、原作が変わってしまう恐怕が在るし・・・
どうした物か・・・

「レイインさん?」

レイイン「.....えつ?ビ、どうしました?」

俺がこれから仕事を考へていると、手に何かの本を持ったメイドさんが俺に話し掛けてきた。

「一体、俺に何の用だの?」

「昨日、教えて欲しいと言われた料理のレシピ、本にしてきました

わ。」

メイドさんは俺に頬笑みながら、手に持った本を俺に渡してきた。

……レシピ?.

……!?

レイン「あ、ありがと!」やれこめす……ワザワザ本にして貰つて下さいません。」

俺は感謝の気持ちで一杯になつたが、直ぐに申し訳ない気持ちで一杯になつた。

だつて、レシピを教えて欲しいって言つたのに、まさか本にして俺に呉れたんだぜ?

誰だつて申し訳ない気持ちになるつて。

「いえいえ、私もレシピを教えて欲しいって言われたのは初めてだつたので、少し気分が高くなつて書いていたら、何時の間にか本になつてしまして……」

メイドさんは、顔を少し赤くして俺にそう言つてきた。

良かつた、疲れてる顔はしてないから大丈夫だな。

仕事に支障が出る様なら、皆さんに俺が謝らないといけないからな……

「「「クスクスクス」」

俺がそう思つていたら、レッドの周りに居たメイドさん達が笑い始めた。

……ジムリーダーに勝つつて言つて笑われたんだろう。

レッド「何で笑うんだよ？俺がリーダーに敵わないつてのか！？」

レッドが少し大きな声を出してメイドさん達に聞くと、カスミさんが腕を組んでレッドの後ろからこの部屋に入ってきた。

……カスミさん、今迄何処に居たんですか？

カスミ「良いじゃない、挑戦してもらいましょう。いらっしゃい、レッド。案内してあげるわ。」

カスミさんがレッドにそう言ったので、レッドは真剣な顔付きになつた。

レイン「カスミさん、俺も付いて行つて良いですか？」

今日中にジムに挑戦して、早く教えて貰つた料理を教えて貰いたい。

それにこの屋敷には、料理を教えてくれる先生が沢山居るしな……

カスミ「ええ、それじゃあ一緒に行きましょ。五分後、玄関に準備をして来て頂戴ね。」

カスミさんは俺とレッドにさつと書いて部屋から出て行つた。

俺はメイドさんから貰つた料理の本を部屋に置いてある鞄の中に入れて、急いで玄関に向かつた。

玄関には既に準備を終えたレッドとカスミさんが居て、俺が来たので屋敷を出てジムに向かつてハナダシティを歩いている。

レッド「おー、待つてよ。ジム……遠いの？」

レッドはハナダシティを見ながら前を歩いているカスミさんに聞くが、カスミさんはレッドを無視し続けて歩き続けた。

こう言つ空氣の事……カオスって言うのかな？

俺自身、カオスな空氣を体験した事が無いから今一分からねえ。

そう思いながら歩いていると、何時の間にか街外れに来ていた。

レッド「おーい！」

カスミ「……街の外れよ。」

レッドが少し困った顔をしながらカスミさんに聞くと、カスミさんは視線を俺達に向ける事無くそう言つてきた。

……機嫌が悪いな、カスミさん……

そう思つていると、俺達の目の前にジムが現れた。

カスミ「着いたわ。……あ、どうや。」

カスミさんは不気味な笑み（「こんな事を言つたら殴られそうだが……）を浮かべながら、俺とレッドにそう言つてきた。

レッドは頭にマークを浮かべ、俺は特に表情を変えずにジムの中に入つて行つた。

ジムの中は誰も居なくて、電気も余り付いてなかつた。

レッド「おい……、此処誰も居ないじゃんか。」

レッドはさう言しながら歩き続けて行くと、何事も無く最後の部屋に着いた。

レッド「カスミー・コーダーは何処なんだよー?」

レッドはカスミさんの顔を見ながらさつまつと、カスミさんは笑いを浮かべながらレッドを見た。

カスミ「コーダーは、此処よー。」

カスミさんは、自分を指差しながらレッドに言つた。

レッド「……………?」

カスミさんの言葉にレッドは口を大きく開けて驚いた顔をした。
俺は知っていたので、特に驚く事も無くレッドとカスミさんから離れた。

まあこの後の展開は知ってるから、巻き添には喰らいたくない。

レッド「あ……またまたー。面白くない[冗談扱いちゃつて。」

レッドは苦笑いをしながらさつまつと、カスミさんはスターリーをボールから出してレッドを攻撃し始めた。

俺はラプラスをボールから出して、ラプラスの上に乗つた。

ラプラス『えつ……と、レイン、これはどう言つた状況なの?』

ラプラスが、田の前で戦っているレッドとカスミさんを見ながら俺に聞いてきた。

……うん、何て言おつか悩むんだけど。

レイン「……簡単に言えばジム戦?」

ラプラス『どうして疑問符が付いているの?』

レイン「……ナレは気にしけやこけないよ。」

俺とラプラスが会話していると、レッドが何時の間にかフシギダネを出してカスミさんに反撃したが、全くフシギダネの攻撃は喰らつてなくて、逆にフシギダネがやられてしまった。

レッドがカスミさんの強さに驚いていると、カスミさんが泣き出してスターileeを撫で始めた。

そしてレッドがカスミさんの気持ちが分かったみたいで、レッドも特訓に加わるらしい。

……今回の俺、完全に空気の存在だな。

カスミ「やつだー。レイン君、私とジム戦をしない?」

カスミさんが笑顔で俺に提案してきた。

……わ、忘れられてなかつた。

No.17 俺はジム戦、レッドは特訓（後書き）

次回はハナダジムに挑戦する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.18 VSスターIII（前書き）

やはり、ポケモンバトルを表現するのは難しいです！

しかも、今回もレイイン無双が在ります。

御了承下さい。

誤字・脱字が在れば教えてください。

s.i.d.eレイン

俺は今、カスミさんと向かい合わせになつて立つてゐる。

俺の前にはラプラスが、カスミさんの前にはスター＝がフィールドでお互いを睨み合つてゐる。

何故こうなつてゐるかと言つと、俺とカスミさんがジム戦をする為である。

レッド「使用ポケモンは一体、ドチラかのポケモンが負けたら其処で試合終了な？」

フィールドの真ん中で審判をしてくれてるレッドが、俺とカスミさんの顔を交互に見て言つてきた。

俺とカスミさんは真剣な顔をしながら、レッドの言葉にゆっくり頷いた。

レッド「それでは……始め……！」

カスミ「スタちゃん、”バブル光線”！」

レッドが試合開始の合図をすると、カスミさんがスター＝に“バブル光線”を指示した。

スター＝はカスミさんの指示に従つて“バブル光線”をラプラスに放つた。

レイン「ラプラス、”バブル光線”に向かつて“冷凍ビーム”！」

ラプラス『分かつた！』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従つて“バブル光線”に向かつて“冷凍ビーム”を放つた。

“冷凍ビーム”を喰らつた“バブル光線”は、凍つてそのまま地面に落ちた。

ラプラスは細かい動きが苦手なので、こいつやつて敵の攻撃を防ぐしか方法が無いのだ。

レッドとカスミさんは、俺が取つた方法を見て呆気に取られていた。

勝負中に相手の動きに気を取られていたらダメですよ！

レイン「ラプラス、“雨乞い”！」

ラプラス『了解！』

俺は呆気に取られている二人を無視してラプラスに指示を出し、ラプラスは俺の指示通り“雨乞い”をした。

すると、部屋に雨が降り始めた。

部屋に“雨乞い”が出来るのも、俺達だけしか出来ない事だ。これも修業をして行つて身に付けた力だ。

レッド「へ、部屋で“雨乞い”が出来るなんて……」

レッドが俺とラプラスを見ながら、驚いた声でそう呟いた。

カスミさんも驚いていたが、何故か驚いた顔より喜んでいる顔だった。

カスミ「確かに“雨乞い”はラプラスを有利に出来る技だけど、私の스타ちゃんだって有利になるのよ？」

レイン「それ位、俺だつて分かつてますよ。だけど、“雨乞い”を指示したのは間違つた指示では在りませんから。」

確かに“雨乞い”は水タイプの技の威力が一倍になる。それは俺のラプラスだけじゃなく、カスミさんのスター＝マーにも当てはまる。

だが、俺は水タイプの技の威力を上げる為に“雨乞い”を指示した訳ではない。

カスミ「そう。……だつたら、間違えた事を教えて上げるわ！スターちゃん、 “バブル光線”！」

カスミさんは不適に笑つてスター＝マーに指示を出すと、スター＝マーはカスミさんの指示に従つて“バブル光線”をラプラスに放ってきた。

しかもその数は、先程の“バブル光線”を軽く凌駕する泡の数だった。

この泡の数の“バブル光線”を喰えれば、ラプラスも只では済まないし、戦いも不利になるだろう。

……そのまま戦い続けねばの話だがな……

レイン「ラプラス、 “雷”！..」

ラプラス『分かつたよ！』

俺がラプラスに指示を出すと、雨雲が急に黒く変化した。

レッド「な、何だ！？」

レッドは黒くなつた雨雲を見て、大声を出して驚いていた。

カスミさんもレッドと同様、黒くなつた雨雲を見て驚いた顔をしていた。

ドツガアアアアアアアアアアアンーーーーー

すると雨雲から大きな雷が落ちてきて、スター＝ミーは疎か“バブル光線”に迄当たつた。

雷が落ちた所為で、煙がフィールドを包んだ。
そして雨雲が消えると同時に煙も消え、フィールドの様子が分かつた。

そこには、元気に喜んでいるラプラスと“雷”を喰らい倒れるスター＝ミーの姿が在つた。

レッド「…………す、スター＝ミー戦闘不能…よつて勝者、レイン！」

レッドが少ししてから正気に戻り、俺の方に手を上げてそう叫んだ。
俺はそれを聞いて倒れているスター＝ミーに近付いて、“トキワの力”を使ってスター＝ミーの怪我を治した。

レイン「悪かつたな、痛い思いをさせちまつて……」

俺がスター＝ミーに謝ると、スター＝ミーは頭？を横に振つて許してくれた。

すると、カスミさんが俺達に近付いてきた。

カスミ「レイン君、凄く強かつたわ。完敗よ。」

カスミさんは笑いながら俺に手を出してきていたので、俺はカスミさんの手を握つて握手した。

そして握手を終えると、カスミさんはポケットから何かを出して俺に渡してきた。

カスミ「ジムバッヂよ。貴方達は未だ未だ強くなれるわ。」

レイン「それは誰にでも言えますよ、カスミさん。人間の可能性が無限大なら、ポケモンの可能性も無限大なんですから。」

俺はカスミさんからバッヂを受け取つて、カスミさんに笑いながらそう言つた。

カスミさんも、俺の言葉を聞いて「そうね。」と言つて頬笑んでくれた。

レッド「カスミ、俺達もレインに追い付ける様に特訓しようぜー。」

レッドがニヨロゾ・フシギダネ・ピカチュウを出して、俺達に近付いてきてカスミさんにそう言つた。

……決めた。

レイン「レッド？」

レッド「ん? どうしたんだ、レイン?」

俺がレッドに話しかけると、レッドは俺の顔を見てきた。

レイン「俺、お前と一緒に旅をするよ。」

No.18 VSスターIII（後書き）

次回はカントーのボックス管理者と接觸する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.19 カントーのボックス管理者（前書き）

話が長くなりそうだったので、一つに分けました。

まあ今日は次の繋ぎの話ですので……

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

No.19 カントーのポックス管理者

s.i.d.e.?/?

わいはカントー地方のハナダシティのはずれ岬に住むどこの科学者や。

わいの研究しとる物は普通のモンと違つたかい、人気の無い此処で研究しとるんやけど……

「えりこーちや。いきなり調子悪くなつてしまつたー。」

わいは腕まくりをして、わいが研究しとる装置の中に四つん這いになつて入つた。

「この“ポケモン転送マシン”ちゅう奴はテリケートやさかい、調整にも氣を使つで、ホンマ。」

わいはわいが研究しとる装置・“ポケモン転送マシン”に愚痴を言いながら、中に在る配線を調整し始めた。

バタン!!

「!?.しもた!..」

するとわいの服が扉に引っかかつて、ポケモン転送マシンの扉が閉まつてもうた。

わいは急いで扉を叩いたんやけど、ポケモン転送マシンが勝手に起動しよつた。

ああ、わいは一体どうなるんや！？

s.i.d e レイン

此處は24—25番道路・・・

俺とレッドはあるの後、一週間カスミさんと一緒に特訓した。
まあその時に間違つてグレイシアが出てきて、二人にグレイシア
の事がバレたので俺の手持ちを一人に公開した。
最初こそ二人は驚いていたが、直ぐに打ち解けて皆と仲良くして
くれた。

勿論、グレイシア達の事は他言無用にしてくれと言つてある。
二人は口ケット団の事も在り、其の約束は絶対に護ると誓つてくれ
た。

そして俺とレッドはカスミさんと別れて、今は24—25番道路
に来ている。

レッド「うーん、そろそろボールの持ち運びがキツくなってきたぞ。

」

レッドが腰に付けているボールを見ながら、少し困った顔をしな
がらそう言つた。

それと同時に、レッドの腰からボールが一個地面に落ちた。

レッド「張り切つて捕まえまくったのは良いけど、この先、どーす
りや良いんだよ？」

レイン「ポケモン転送マシンの調子が安定しないのに、張り切つて捕まえ過ぎたレッドが悪い。」

レッドが俺の顔を見ながら俺に聞いてきたので、俺は呆れた顔をしながらレッドにそう答えた。

カントーのポケモン転送マシンの管理者は、この先のはずれ岬に住んでるマサキさんだつたよな？

未だこの頃は調子が安定していないから、ボックスにポケモンを預ける事が出来ない。

なので俺達ポケモントレーナーは、ポケモンを捕まえ過ぎない様にしているんだが……

レッド「ポケモンが居たら捕まえたくなるだろ？」

レッド（バカ。天然）は俺達とは違つた。出てきたポケモン全てにバトルを挑んでは、ボールを投げてポケモンゲットを繰り返していた。

其の所為で、レッドの腰に付けられているボールの数は10を軽く超えた。

レイン「其れはお前だけだつて。」

レッド「あつ、ボールが……」

レイン「話を聞けよ。」

俺がレッドにツッコんだのだが、レッドは下に落ちたボールを取るのに集中していたので、俺は少しイラッとしたがらレッドにそう言った。

するとレッドの前に、木の枝を紐に括り付けて運んでいる一匹の

「カラッタが歩いていた。

レッド「あれって……、カラッタだよなあ。でも、何か変だぞ。」

レッドは田の前に居るカラッタを見て、田を丸くしながらカラッタの感想を小さい声で言った。

……あのカラッタ、何処か人間の顔をしている様な……

俺が一人で考え込んでいると、レッドが左手にボールを構えてゆっくりカラッタに近付いていた。

レッド「さつと新種のポケモンだな。スゲェぞつ！…よーし！」

……レッド、お前つて奴は……

「ふいーつ、全く火起こすのも一苦労や。」

するとカラッタが立ち止まって、手で額の汗を拭きながらそう言った。

……へ？

「ホンマにこんな板切れ一つ、人間やつたら一発で運べるつちゅーのにな。」

「カラッタは木の枝を見ながら、独り言の様な声で愚痴を言つていた。

……M A · N H · D E ?

「「ほ、ポケモンが……ポケモンが喋ったアアア！？」」

俺とレッドは、声を揃えてカラッタを見ながら大声を出して驚いた。

た。

「ひつ、人や人や！こんな辺鄙な所、誰も来てくれへんかと思ったわ。

」

コラッタは関西弁で俺達の顔を見ながら、嬉しそうな顔をして俺達にそう言つてきた。

……ん？

ハナダのはずれ岬に住んでいて、関西弁で話すコラッタ？

……まさかな……

レッド「あ……あ……」

レッドは関西弁で話すコラッタを見て、尻餅を付いて言葉を発せなくなつていった。

俺はどうなかつて？

最初は驚いたけど、今考えたら毎日ポケモンと話していたからな。今は至つて普通だぜ。

……つて、俺は誰に話し掛けてるんだよ？

「助かつたあ～！兄ちゃん、ちょっと手エ貸してや。」

関西弁のコラッタは、俺達を見て困った顔をしながら俺達に頼んできた。

だがレッドは、口をパクパクさせて全く話を聞いていなかつた。

レイン「レッド、少し落ち着けつて。」

「そやつたな。」の格好じや驚くわな。「

俺がレッドに少し呆れながらそれについて、関西弁の「カラッタ」が右手で頭を搔きながら俺達にそう言つてきた。

「ええか? わいは今までこなないな姿やけど、其の正体はポケモン評論家!」

関西弁の「カラッタ」が右手で胸を叩いて上へんとして、自分の正体を俺達に教えてきた。

……やっぱこの人が……

「岬の小屋のマサキ……」

関西弁の「カラッタ」が自己紹介をしている途中で、遠くから現れたオニードリルが関西弁の「カラッタ」を足で捕まえて飛んで行つた。

俺達は余りにも突然だったので、オニードリルを何事も無かつたかの様に見ていた。

「ちよっと兄ちゃん等! ボーッと見とらんで助けてえな!」

するとオニードリルに捕まっている関西弁の「カラッタ」が、俺達を睨みながら俺達に助けを求めてきた。

レッド「助けるつたつて……」

するとレッドはポケモンを三体出して三体の顔を見ると、三体はレッドの顔を真剣に見ながら頷いた。

レイン「まあ一応助けに行こうぜ。」

俺はロコンとグレイシアをボールから出して、レッドの顔を見て

そう言った。

レッド「ショーガねえな。」

レッドは俺達の答えを聞いて、仕方がない様な顔をしてオーディールを見た。

レッド「ま……待てーー！」

レッドはやる気の無いく声でさう叫んで、俺達はオーディールを追掛けた。

No.19 カントーのボックス管理者（後書き）

次回はオーデリルとの戦い（を予定しています）

次回もお楽しみに！

No.20 ヴィオードリル（前書き）

先週は更新出来なくてすいません。

バイトが忙しくて更新出来ませんでした。

はあ、速くバイトを辞めたい……

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

s.i.d.e レイン

俺はロコンをボールから出し、レッドはフシギダネと「ヨロゾ」とピカチュウをボールから出してオードリルを追い掛けた。
オードリルに捕まつたコラッタ（仮）は、捕まりながらも大きな声で俺達に助けを求めてきた。

レッド「先ずは、オードリルの動きを止めなくちゃ…」

するとレッドが、オードリルとフシギダネを交互に見ながらそう言つた。

俺はロコンを見て、お互に見合ひて無言で頷いた。

レッド「フシギダネ、『葉っぱカッター』！」

レイン「ロコン、『火炎放射』！」

レッドはフシギダネに『葉っぱカッター』を、俺はロコンに『火炎放射』を指示を出した。

するとロコンとフシギダネは、俺達の指示に従つてオードリルに技を放つた。

だが、フシギダネが放つた『葉っぱカッター』とロコンが放つた『火炎放射』はオードリルに簡単に避けられた。
……あのオードリル、中々やるじやねえか。

「あ、アホーーーー！そないな攻撃で効くかっちゅーの！」

するとコラッタ（仮）はオードリルの足でジタバタしながら俺達

に文句を言つてきた。

……何か助けて貰う癖に、凄く偉そつだな……

「兄ちゃん等、覚えとき。飛行ポケモン相手なら、凍らすとか痺れさすとかで、先ず翼を封じるんや。そないな草ポケモンと炎ポケモン、役に立つかつちゅーの！……何や、居るやないけ。其の一匹使いいな。」

するとコラッタ（仮）は、最初に俺達を見ながらそう言つて、次にフシギダネとロコンを見てそう言つて、最後にニャロゾとピカチュウを見てそう言つてきた。

……助けるの、冗談抜きで止めようかな？

ロコン『……レイン、助けないとダメなのかな？』

するとロコンが、物凄く嫌そうな顔をしながら俺に聞いてきた。
俺も助けるのは嫌になってきたけど、“一応”人間で物語のキーになる？人だから助けないと……

レイン「我慢だ、我慢をしろロコン。」

レッド「助けてやろ？なのに何て奴だ！」

俺がロコンを宥めながら走っていると、レッドがコラッタ（仮）に苛立ちながらニャロゾとピカチュウを見た。

レッド、お前の気持ちは痛い程分かるから、今は我慢をするんだ。

レッド「えーい、しょうがねえ！“冷凍ビーム”！“電磁波”！」

するとレッドはニャロゾに“冷凍ビーム”を、ピカチュウは“電

磁波”を指示した。

「『ロゾ』とピカチュウは、レッドの指示に従つて“冷凍ビーム”と“電磁波”をオーデリルに向かつて放つた。

だが……

「『あやわわわわ……？』

「一体の技はオーデリルではなく、オーデリルに捕まつているコラッタ（仮）に当たった。

一体の技を喰らつたコラッタ（仮）は、大声で悲鳴をあげた。

あ～あ、やつちやつた……

「『うひちこ当ててびないすんねん！死に掛けたやないか――っ……』

するとコラッタ（仮）は、助けて貰つ癖に逆ギレして俺達にそう言つてきた。

俺は今にも切れそうな口吻を抱き抱えて暴れない様にしてレッドを見ると、レッドはコラッタ（仮）を睨みながらかなり切れていった。

「のままだつたらレッドはコラッタ（仮）を見捨てるかも……俺ももう少ししたら……

「兎に角、空飛んでるやつかい、このままじゃ埒がアカン。止まつたとこ狙つてやー！」

レッド「そんな事言われたって……」

コラッタ（仮）は俺達にそう指示を出してきたが、レッドは困った顔をして空を見上げた。

俺もレッドに釣られて空を見上げると、オーデリルが飛んでいる

近くに雷雲が浮いていた。

……よし！

レイン「レッド、あの雷雲を使ってオーディオルを止めやー。」

レッド「ん？……ー？わ、分かったー！」

俺がレッドに雷雲を指さしながらやつて、レッドは雷雲を見て俺が何をしたいのかを分かつてくれた。

レッド「ピカチュウー！」

レッドがピカチュウの名前を言つと、ピカチュウはレッドの体を上つて勢い良くジャンプし、雷雲に近付いた。

そして手を上げて、雷雲の電気を操作し始めた。
すると雷雲が“ゴロゴロ”と鳴り始めて、今にも雷が落ちそうだ
った。

レッド「下からがダメなら上からだー！」

「無茶したらアカンー！」

レッドがコラッタ（仮）に作戦を言つと、コラッタ（仮）が完全に怯えた顔をしながら俺達に言つてきた。

其の瞬間……

巨大な雷がオードリルに落ちて、オードリルと「カラッタ」（仮）は下に向かつて落ちてきた

レッド「やった！」

レッドは指を鳴らし喜び、俺とレッドは落ちてきたオードリルに近付いた。

……流石に至近距離から効果抜群の電気タイプの技、しかも威力が上から数えたら速い“雷”を喰らつたんだから、もう立てないだろ。

俺がそう思った時、突然オードリルが起き上がりつた。するとオードリルは翼を広げ、何かの技の構えをしてきた。

この構えは確か……

レイン「レッド、一ヨロゾに“影分身”を指示しろ。“ドリル嘴”だぞ、あの構えは。」

レッド「わ、分かった！」

俺がレッドに指示を出すと、オードリルが一ヨロゾに“ドリル嘴”をしてきた。

「あ、アカン！ 兄ちゃん等、氣イ付けえ！ “ドリル嘴”やー！」

近くの崖の上から「カラッタ」（仮）が大声を出して俺達に向つてきたが、オードリルはもう目の前迄来ていた。
そして……

グサツ――

オニードリルの“ドリル嘴”を喰らつた二ヨロゾは、オニードリルの嘴が腹の部分を貫通した。

だが其の一ヨロゾは“影分身”的二ヨロゾで、影分身の一ヨロゾは蜃氣楼の様に消えていきオニードリルは凍つていった。

「影……分身？」

レッド「来る技が分かつてたから何とかなったよ。」

レイン「俺が教えたからだる。」

「ラッタ（仮）は一ヨロゾが使つた技を啖いて、其の啖きを聞いたレッドが「ラッタ（仮）に笑顔で言つたので俺は呆れ顔でレッドにツッコんだ。

「命縮んだわ。」

「ラッタ（仮）は其の場に座り込んで、溜め息を吐いて俺達にそいつ呟つてきた。

俺達は岬の小屋にやつてきて、コラッタ（仮）を人間に戻す準備をしていた。

そしてレッドが機械の機動スイッチを押した。

暫くすると機械が止まり、扉から一人の青年が出てきた。

「やれやれ助かったわ。分離プログラムは内側に留つたら押せへんさかいに、困つとつたんや。」

すると青年が頭を搔きながら俺達にそつと語つてきた。

レッドは青年が出てきた機械を不思議そうに見ていた。

レッド「これって……？」

「ポケモン転送マシンや。ポケモンやアイテムを離れた場所に転送出来るつちゅう優れモノやでえ！」

「す……スゲー！」

「レイン」「やつぱこれがポケモン転送マシンだったのか……」

青年が胸を張つて俺達にポケモン転送マシンの事を説明してきたので、レッドは素直に驚き俺は感心した顔をしてポケモン転送マシンを見た。

「といひがうつかり機械に巻き込まれてしまつて、転送先に“あの”コラッタが居つたさかいに合体してあの様や。」

すると青年は自分がコラッタになつた原因を語つてきたので、俺とレッドは青年を見て苦笑いをした。

「わや、挨拶のせつ直じや。せじまなマサキ。」

レッド「あ……俺はレッド。」

レイン「俺はレインボー、レインひつて呼んで下れ。」

俺とレッドは青年・マサキさんと堅い握手をして自己紹介をした。
セイジの人がカントーのボックス管理者のマサキさんだったか
セイジだつたか

レッド「俺、最強のポケモントレーナーを目指して旅をしてるんだ。」

…

レイン「俺はカントーのジムを制覇する為に旅をしてます。レッド
とは半分田的が一緒なので旅を一緒にします。」

さぬとレッドがマサキさんに旅をしてくる理由を聞いたので、俺
もレッドに続けて旅をしてくる理由を言った。

マサキ「最強のポケモントレーナージム制覇か……。凄いやない
かーそらええ。助けてもらおれやー! ポケモン評論家のこのマサキ、
何でも相談にのつまつせー!」

さぬとマサキさんは俺とレッドが旅をしてくる理由を聞いて、素
直に驚いて直ぐに笑顔で俺達にやつてきただ。

マサキ「先ずは、其の重たいつな荷物!」

マサキさんはレッドにやつて、ヒザの腰に付いてこるボーラー
ルを手に取った。

あつ、そのボールに入ってるポケモンは……

マサキ「預かつとくわ。この転送マシンで、何処に居ても即時お届けしまっせ、ダンナ。勿論、レイン君も捕まえたら直ぐに届けるで！」

マサキさんは俺とレッドに向かって、レッドから取ったボールを見た。

あ～あ、見かけたよマサキさん……

マサキ「ん？……ひつ！？お、オーディル！？」

マサキさんはオーディルを見て、其の場で尻餅を付いて怯えた顔をした。

其のオーディルはわざわざレッドが捕まえた奴で、十個以上在るレッドのボールから取るなんて……マサキさんは何かを持つてるな。

俺はそう思いながら、レッドと一緒にオーディルに怯えるマサキさんを見続けた。

No.20 VSオードリル（後書き）

次回はポケモン大好きクラブに行く話 + （を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No.21 ポケモン大好きクラフ会長が…（前書き）

先週はすいませんでしたアア！！

先週は体調を崩して書けませんでした…

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

sideレイン

俺とレッドはマサキさんとあれから別れて、地下通路を通りてクチバシティの外れにやつて来た。

レッドはポケモンからボールから出して歩いているが、俺のポケモンは未だこの頃は知られていない。ポケモンばかりなのでロコン以外はボールの中に入つて貯つている。

レッド「スッゲー良い天気だなー！」んな日は、お前達もボールの中より外の方が良いよなあ。」

するとレッドは背伸びをして固まつた筋肉を解して、新鮮な空気を思いっきり深呼吸をして吸いながらポケモン達を見てそう言つた。俺も深呼吸をして新鮮な空氣を吸うと、潮の匂いがしたので俺は目を凝らして前を見てみるとクチバシティと海が広がっていた。

「アーティストの海はやくばこにまくばる」

レッドも漸く海に気付いて、テンションを上げてそう言った。

……レッドのポケモンは海を見た事が無いのか？

「ほ、ほ、そう言やお前達、海を初めて見るんだっけ？」

するトレーナーは自分のポケモンを見てそう言って、港に停泊して

いる大きな船を見た。

マカラに海つて無いのか？

否、在った筈なんだけどな……

「サン...アン...ヌ号か。ベーベツ。」

レッドは港に停泊している大きな船・サントアンヌ号の名前を言って、何かを決めた顔をして俺の顔を見てきた。

スッゲエ嫌な予感がするんだけど。

レジで「ねーし、ちよつと見てみよーやー。」

レッドはやつ言って、自分のポケモン達と一緒に走ってサントア

……
て、

レイン、ちよ、ちよつと待てよレッジー。」

田中：『やれ、レイン！ 置いて行かないでやー！』

俺と口一辺もやう言ひ、レッカを追い掛けたが起り出した。

レッド「へーつ、やつぱ『テツカいなー。』」

レイン「お、お前マジフザケんなよ……………ハア……………ハア……………」

レッドは田の前にサントアンヌ号を見てそう言つて、俺は膝に手を置いて肩で息をしてレッドにそう言つた。

しかしホントに力い船だよな、サントアンヌ号つて。

……そう言えば、急に静かになつたなレッドの奴……

俺は横に顔を向けると、先程迄其処に居た筈のレッドとレッドのポケモン達の姿が無かつた。

……つて、

レイン「レッドの奴、俺を忘れて一人でサントアンヌ号に行きやがつたアアアー！」

ロコン『レイン、ドンマイ……』

俺が大声でそう言つと、ロコンが同情した田で俺を見てそう言つてきた。

「少年よ。」

「……へ？」

俺がロコンに同情した田で見られていると、後ろから誰かに話しがけられたので俺は後ろを向いた。

其処には黒のタクシードに黒のシルクハットにサングラスと言つた黒一色で包まれていて、凄い量の鬚を生やした小父さんが立つていた。

……誰ですかこの人は、見た事が無いんだけど。

「腰に付けどるのは、もしさモンスターボールでは無いかな？」

「えつ？ ま、まあそりですけど……。」

小父さんは俺の腰に付いてるボールを見ながら聞いてきたので、俺は戸惑いながら其れを肯定した。

「偉い！ その若さでポケモントレーナーとは見上げたもんじや！」

「別に珍しくも何とも無いでしょ？」

小父さんは俺の顔を見て誉めてきたので、俺は少し困った顔をしながら小父さんにそう言った。

すると小父さんは俺の言葉を聞いて、何か感じ取った顔をして俺を見てきた。

……何を感じ取ったのは分からんがな。

「ムムム……。少しも傲らぬ其の態度、益々タダモソでは無い氣配しゃ。」

すると小父さんはそう言って俺の顔をジロジロ見て、俺の後ろに回り込んでボールを取ろうとした。

な！？

レイン「な、何すんだよ！？」

「どれ、ちょっとワシに其の中身を見せてみい！」

俺はラプラスが入ったボール以外のボールを回収出来たが、ラプラスが入ったボールは小父さんに取られてしまった。

あ、新手の泥棒かよ！？

俺は小父さんに取られたボールを奪い返す為に小父さんの胸を掴

もつとしたが、掘る前にラプラスをボールの外から出した。

……は？

「おおーーっ！？す……素晴らしい！ソッチのボールも見せてくれんか！！」

小父さんはラプラスを見て感激し、俺の持つてた残りのボールも奪おうしてきたので俺は急いで鞄にボールを直した。

「ムムム、残りのポケモンは見せてくれんのか……。まあ良い、決定じゃ！君を我がポケモン大好きクラブ名譽会員に認定する！」

すると小父さんは俺にそつまつてラプラスのボールを返してくれた。

……この人、ポケモン大好きクラブの会長だったのかよ。

レイン、「否、行き成りそんな事を言われても……あつ、レッドだ。」

俺はポケモン大好きクラブの会長に苦笑いしながら視線を反らしてそう言つた時、視線を反らした先にレッドが座り込んでいたので俺は思わずレッドの名前を言つた。

するとポケモン大好きクラブの会長はレッドと俺を交互に見て、走つてレッドの所に行つて俺と同じ会話をした。

ラプラス『え？……と、レイン、びづいたの？』

レイン「……何でも無い、ワリイ急にボールから出して。」

俺はラプラスに謝つてラプラスをボールに戻して、鞄に直したボールを腰に付けた。

するとレッドも俺と同じでポケモン大好きクラブ名譽会員になつたので、俺達は取り敢えずポケモン大好きクラブの会長について行つた。

No.21 ポケモン大好きクラフ会長が…（後書き）

次回はサントアンヌ号に進入する話（を予定しています。）

次回もお楽しみにー！

N o . 22 サントアンヌ号に進入だ！（前書き）

今回から「」の前の名前を省きます。

まあ面倒臭くなつたので……

今週の木曜からテストなので、来週は更新が出来ない可能性が在るので……

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

No.22 サントアヌス号に進入だ！

s.i.d.e レイン

俺とレッドはポケモン大好きクラブ会長に連れられて、ピカチュウが描かれた看板が付けられているポケモン大好きクラブハウスにやって来た。

中に入ると、沢山の人達が自分のポケモンについて楽しそうに雑談していた。

すると会長が近くに居た人に資料を渡した。

「これをポストに投函してくれたまえ。」

「あっ、ポケモンスタンプ！」

レッドが会長の渡した封筒に貼っていたポケモンスタンプに気付いて、何故かポケモンスタンプを見てテンションが上がっていた。

「当クラブは、わしが設立したポケモンを可愛がるクラブじゃよ。」

会長がポケモン大好きクラブの設立した理由を語ってきたので、俺とレッドは苦笑いしか出来なかつた。

「会報もホレ、この通り。さあ、君達にも1冊。」

会長は俺達にそう言つてポケモンクラブ会報を渡してきた。

新聞のトップ記事は『メノクラゲと入浴して感電』だつた。

レッドが小さい声で「何じゃそりや？」と呆れて言つたが、俺も呆れてたからレッドの気持ちも分かるんだけどな……

「ああー皆注目ー注目ー今日から我がクラブの名誉会員となつた、レッド君とレイン君じゃ。」

「ちよつ……ちよつと、俺は……」

「俺は入会してませんよ。」

会長が此処に臨む会場にさう叫んだので、レッドは焦りながら俺は冷静に会長に言った。

すると此処の会員の人々が俺達の周りに集まってきて、ポケモン達をもみくちゃし始めた。

俺は口コソしか出してないからな。

だつてカントーのポケモンはロココンとラプラスしか居ないし、ラプラスは大き過ぎるから出せないんだよな。

レッドのピカチュウがもみくちゃされて、かなり苛立つているが我慢していた。

『れ、レインー、た、助けてー！』

するとロココンが涙目になりながら俺に助けを求めてきたので、俺は苦笑いしながらロココンを抱っこして助けた。

するとレッドが一コロゾの思い出を話し始めた。

俺もレッドと一緒に長く一緒に居る訳じゃないが、皆とは他のトレーナーに負けない信頼関係を築いているぜ。

俺がその事を考え込んでいたら、さつき迄騒がしかつた会員達が急に静かになつた。

「どうしたんだ、レッド？」

「あー、否、戦うつて言つたら急に静かになつてさ……」

俺がレッドに近付いて聞くと、レッドも今一分かつてない顔をしながらそう言つてきた。

「ポケモンで戦いとな？」

「だつ、だつて、当たり前でしょ？」

すると会長が少し怒りながらレッドに聞いてきたので、レッドは少し会長に怯えながらそう言つた。

「否、ワシ等は『ポケモン大好き』クラブじゃから、戦わせるなんて事は……」

「え、えええええつ！――！」

「う、煩いレッド……」

会長が戦わせないと言つた瞬間レッドが大声を出して驚いたので、俺は片手で耳を塞ぎながらレッドに文句を言つた。

横で行き成り大声で叫ばれたら、誰だつて怒るよな？

俺は心が広いから未だ文句を言うだけだが、これがグリーンさんだつたら多分喧嘩してたな。

「大変だーっ！！僕のナッシーが居なくなつたあああ――！」

レッドが会長と何故か漫才的な会話をしていたら、突然会員の人と思われる人物が勢い良く扉を開けて泣きながら入ってきた。其の瞬間、此処に居た会員たちが深刻な顔をして一気に空気が重くなつた。

そして会長は「またか……」と呟いて、棚に置かれている写真立てを見た。

「どうしたんですか？」

「会長のケーシイもね、1ヶ月前に盗まれてしまったの。」

俺が聞こうとしたらレッドが俺の代わりに聞いてくれて、会員の一人が会長の事を教えてくれた。

そして他の人も被害が沢山出ている事や1匹や2匹じゃない事を教えてくれた。

クチバシティ……ポケモン盗難事件……サントアンヌ号……まさか……？

バンッ！！

「この話、詳しく聞かせて下さい……。」

俺がキーワードを頭の中に並べて仮定を立ててみると、突然レッドが机を叩いて会員の人達にそう言った。

俺も協力するんだし、会員達の話でも聞いておくか。

……

会員達の情報では、盜難事件は一ヶ月に一度集中して起こっているらしい。

飼い主じゃなければ一体のポケモンをボールに入れるのも一苦労だが、大量に盗んで運んでいるのが事実……

やっぱあれだよな……

「ん？ レイン、船なんか見てどう？ 船？」

俺が窓の外に在る船を見ていると、レッドが俺に話しかけて船に気付いて何か考え出した。

「あの港の大きな船は何処へ行くんですか？」

「サントアンヌ号ですね。クチバシティジムリーダー、マチスが、グレン島に荷物を運ぶとか……」

レッドは会員から話を聞いて、顎に手を当てて考え出した。

そして少しすると、何か思い付いた顔をしてサントアンヌ号を見た。

「レイン、一緒に行くぞ！」

「嗚呼……」

「待て……」

レッドがサントアンヌ号に向かつて走り出したりで俺も走り出そうとしたら会長が俺達を呼び止めてきた。

そして真剣な顔をしながら俺達に近付いてきた。
な、何か在るのか？

「レッド君、君に一つだけ頼みが在るんじゃがの。」

「な、何ですか？」

「出かけるんなら、其の間ピカチュウを抱かせてほれんかのう？」

ドタッ！！

会長が余りにもフザケた事を言つたので、俺とレッドは転げてしまつた。

全く、この人は抜けてる所が在り過ぎだろ……

結局、レッドはピカチュウを会長に預けて、俺達はピカチュウ抜きでサントアンヌ号に向かつた。

No.22 サントアンヌ号に進入だ！（後書き）

次回はエレブーとの最初のバトルの話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No.24 VSHレター 其の1（前書き）

アップネエ、後少しで更新が遅れる所だつた……

今回は初の一歩構成？です。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

sideライン

俺とレッドは今、サントアンヌ号の前に在る荷物の陰に隠れて船の周りの様子を伺っている。

船の周りは田つきの悪いゴシイ水兵ばかりだが、其処迄厳重に警備されている訳じや無かつた。

だが“念に念を”や“石橋を叩いて渡れ”と言つ謬が在るので、俺はレッドに指でサントアンヌ号の裏を指さすと、レッドは俺が考えた作戦を分かつて呉れたのか真剣な顔をして無言で頷いてくれた。そして俺達は海に静かに入つて、何とか上れそうな場所を見つけたのでフシギダネの“弦の鞭”を使ってサントアンヌ号に進入した。

「レッド、此処は敵の本拠地だ。フシギダネ一体を此処に置いておるのは危険過ぎる、だからボールに直しておけ。」

「分かつた。」

俺は小さい声で的確な指示をレッドにすると、レッドも小さい声で了解してくれてフシギダネをボールに直した。

本来原作なら此処でフシギダネを置いて進むのだが、原作通りに進まなかつたらレッドは此処で最悪の場合死んでしまう可能性がある。

なので保険を掛けてフシギダネをボールに直して貰つたのだが、やはり心配なのは心配。

なので俺はラプラスを海に出して、“白い霧”を使って身を隠して貰つた。

「じゃあ、油断せずに進もうぜ。」

「嗚呼。」

そしてレッドを先頭に、此処の水兵にバレない様にサンタランヌ号を進んで行つた。

俺はレッドの後を付いて行き、レッドは一つの部屋の前にやって来た。

「この部屋が怪しかったんだよな……」

レッドは警戒しながら部屋の扉を開けて、ゆっくり入つて行ったので俺の部屋に入つて行つた。

しかし、こんな薄暗い部屋にポケモンを閉じ込めて置くなんて……やっぱロケット団は壊滅させなきゃならねエ。

「…………あれ？ 何も無いや。わたくしのせんのせこだつたのかな？」

レッドは部屋を見渡しながらうつむいて俺の顔を見てきたので、俺は顔を横に振つて知らないと合図した。

俺は原作を知つているが実際に此処に来たのは今回が初めてなんだから、俺に聞かれても何も答えられねエ。

俺がそう思っていたら、気の箱の近くにボールが落ちていた。

……不自然だ、否、不自然過ぎるだろ。

ゲームではアイテムが落ちても可笑しくないが、此処は現実でしかも敵の本拠地。

敵がワザワザ俺達にアイテムを呉れるのか？

……つて違う！

あれは、

「れدد」「つわあ！？」しまった！」

俺は原作を思い出しレッドに注意しようと思つたら、レッドが捨ておうとしたボール、否、ボールサイズのビリリダマが“スパーク”を放ってきた。

俺は急いでロコンをボールから出して、レッドは一ヨロゾ・俺はロコンに指示を出した。

「一ヨロゾ、“水鉄砲”！！」

「ロコン、“火炎放射”！！」

一ヨロゾの“水鉄砲”・ロコンの“火炎放射”を喰らつたビリダマは跳ねながら逃げて行つた。

ふう、一先ずこれで安心だな。

「ふーっ、焦つたぜ。紛らわしい形しやがつて。おい、大丈夫か？」

「……嗚呼。」

レッドが右手で額の汗を拭きながら俺に聞いてきたので、俺はあたりを警戒しながらレッドに応えた。

……一気に囲まれた、今のビヨンダマは囲だつたのか？

バタンツー！

すると突然、レッドの一郎ゾが倒れた。

チッ、さつきのジムリーダマの“スパーク”を驗らつてたのか！？

「お、おこ、どうしたんだ一郎ゾ？」

レッドが一郎ゾを抱えて一郎ゾに話し掛けたので、俺は急いで一郎ゾに近付いて“トキワの力”で一郎ゾの怪我の応急手当をした。

「フフフ。ダメージが後から来たようだな。」

すると後ろから、男の声が聞こえてきた。

俺達はその声を聞いて立ち上がりあたりを警戒すると、急にこの部屋の電気が点いた。

「水は電気を最も良く通すからなあ。」

俺は後ろを見ると、この街のジムリーダーのマチスと、この船の水兵が立っていた

そして周囲には、大量のビヨンダマ・マルマイン・コイルが俺達を囲んでいた。

「さて、招かざる乗客には厳しい罰を下えるのが、我がサントアヌ号のしきたりでね。」

マチスはレッドの一囃ロゴを見下しながらそつと笑って、不気味に笑いながら俺とレッドを見てきた。

さて、此処から一体どうやってこの状況をひっくり返そうか……

「悪戯のお仕置きにしては、ちょっと厳し過ぎたか。……サントアノヌ号へ何しに来た?」

「街から沢山のポケモンが居なくなってる。俺達は……それを調べに来ただけだ!」

マチスが睨みながら俺達に聞いてきたので、レッドが警戒しながらマチスにそう言った。

するとレッドの話を聞いたマチスと水兵達が、声を出して笑い出した。

「それが俺達の仕業だつてのか?言い掛けりも良い所だ。」

マチスはまるで被害者の様な言い方で俺達にそつと、親指を自分に向けて威張った顔をした。

「俺達はなあ、平和惚けしきまつてるカワイイソーなポケモンを救出してやつてるのさー序でにその報酬としてちーっと、儲けさせて貰つてるだけだ!—ウワハハハハハ!—!」

「結局やつてる事は肩じやねエか。」

マチスが意氣がつてベラベラと話しだしたので、俺は殺氣を放ちながらマチスにそつとマチスは黙り込んだ。

「……調子に乗るなよ、餓鬼。一匹だけで俺達に適つと思つての
か？」

「思つてゐんじゃねエ、事実を述べただけだよ、肩野郎。」

マチスが少し切れて俺にそう言つてきたので、俺も少し切れてマ
チスに言つとマチスが完全にブチ切れた。

「良いぜ、止めの一撃を喰らわせてやるよ。」

マチスがそいつと、マチスの後ろから鎖で拘束されたエレブー
が現れた。

「此奴は取り分け凶暴でな。ボールに入れる事もまま成らん。」

「ポケモンがテメエに懐いてないだけだろうが。ポケモンの所為に
してんじやねエよ。」

ポケモンが凶暴なのはトレーナーに懐いていないだけ、ポケモン
は信頼するトレーナーには絶対に懐く。
こう言つて自分の所為をポケモンの所為に押し付ける奴は一番嫌
いだ。

「エレブーツ、あの生意気な餓鬼を殺せ！！」

マチスがそう言つた瞬間エレブーの拘束が外れて、エレブーは
“電光石火”で俺達に近付いてきて“雷パンチ”を放ってきた。

ガガガガガガンッ！！！

だが俺達はギリギリエレブーの“雷パンチ”を避けたが、“雷パンチ”を喰らつた床は大きな穴が開いていた。

「“雷パンチ”の底力を見たか！！」

チツ、懷いてないとは言え、彼処迄“雷パンチ”的威力が高ければ喰らつたら命の保証は無いぞ！

どうすれば……ん？

……そうだ、こいつすればこの不利な状況を有利な状況に変える！

「レッド……」

俺は出来るだけ小さい声で、マチスにバレン様にレッドに作戦を伝えた。

レッドは俺の作戦に賛成してくれて、ニヨロゾヒマチスにバレン様に指示を出した。

「ロコン、『炎の渦』！！

『分かつた！』

俺がロコンに指示を出すと、ロコンは俺の指示に従つて巨大な“炎の渦”を上に出現させた。

「なー？ひ、怯むなエレブー！！

「今だ、ニヨロゾー！！」

カキンッ！！

ロゴンの“炎の渦”に気を取られていたマチスは、ニヨロゾが少しづつ出していた水に気付かず足をニヨロゾが出していた水を通して“冷凍ビーム”を喰らって足を凍らされた。

俺の考えた作戦は至って簡単、俺が時間を稼ぐからニヨロゾでマチス達の足を凍らせる。

原作ではギリギリな作戦だが、今は俺が居るので成功する確率はグーンッと上がる。

なので俺はこの作戦を実行した訳だ。

「チャンス！！」

レッドはそう言って煙り玉を地面に叩きつけた。

そして俺達は、マチス達が混乱している間に部屋から出てその場から逃げた。

No.24 VSヘルパー 其の一（後書き）

次回は今回の続きを話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No.25 VSHELLER 其の2（前書き）

久々に長くなつた。

しかし時間が危ねエ、ギリギリ間に合つたよ。

誤字・脱字・変な所が在れば教えてください。

sideライン

前回の粗筋

レッドと一緒にサントアンヌ号に進入 取り敢えずレッドを先頭にして進む レッドが一回目に入した時に怪しいと思った部屋に入る 中に入つたが何も無い 違う部屋に行こうとしたらボール発見！ 取ろうとしたらボールはビリリダマ！？ 何とかビリリダマを撃退、しかしこの街のジムリーダー・マチスとその仲間・マチスのポケモン達に囲まれる 色々と話していたが結局敵対 マチスの切り札？のエレブー登場 意外にも強かつたので煙幕を使って一時退却 誰も居ない甲板で身を隠している（今此処）

「……誰も居ないな。」

俺は立てられた木の陰から廊下を見て、誰も居ない事を確認してレッドを見た。

レッドはマチス達の足止めをしたニヨロゾを、苦笑いしながら撫でていた。

……何故苦笑い？

「ちっちゃい頃、ガキ大将に追い掛けられた時は、よく、ああやつて逃げたっけな。」

……成る程、レッドとニヨロゾは小さい頃から一緒に居るから同じ体験をしてたのか。

つか、ガキ大将つてリアルに居たんだ。

俺が転生する前の世界はガキ大将は居なかつたが、虐めをするグ

ループのリーダーは居たな。

それを考えると、ガキ大将の方が全然良いよな。

まあ俺は、虜めていた奴をぶつ倒して虜められていた奴を助けてから、色々な奴から嫌われてたけどな。

「……レイン、何か顔が暗いけど大丈夫か?」

「あ、嗚呼。……一度体勢を整えよう、俺のポケモン達が本気を出せば簡単に勝てるが、ポケモンがポケモンだから戦えない。だから、今は口コソ、フシギダネダメージを負ったニョロゾで戦わないといけない。」

「……そうだな。」

俺が黙り込んで昔の事を思い出していくと、レッドが心配そうな顔をしながら聞いてきたので、俺はレッドに大丈夫と言った。

そして体勢を整える提案とその理由を言つと、レッドは無言で頷いてくれた。

そして今度は俺が先頭になり、レッドは一歩ロゾを背負つて息を潜めながら歩いて行つた。

そして少し歩いていると、俺達を探しているコイルの大群が廊下に現れた。

しかし、此処迄コイルが居るのに俺達を見つけられないとなると

「アッ、完全に俺達を誘導してやがるな。」

「……そつなのか?」

俺が小さい声でマチスの作戦を叫つと、レッドが顔を傾けながら

俺に聞いてきた。

「……レッド、少しば賢くなってくれよ……

「……これだけのコイルが居て俺達を未だに見つけられてないんだ、俺達をこのサントアンヌ号の何処かに誘導して倒そうとしてるんだろ。」

俺がそう言いつと、レッドはハツとした顔になつてコイルの大群を見た。

ホント、ほんの少しだけで良じから賢くなってくれよ……

「だけど、この作戦にワザと引っ掛かつてマチスを倒そうぜ?」

「…?あ、嗚呼!」

俺が不適に笑つてレッドにそう言いつと、レッドは驚いた顔をしたが直ぐに何時もの顔になつて握り拳を作つて応えてくれた。

そして俺とレッドはマチスに悟られない様に無言で、コイル達の視界に入らない様にワザとマチスに誘導されて行つた。

チツ、誘導されてるつてのは分かっているが、コイル達を避ける事は“SASUKE”のアトラクションみたいでシンドい。マチスの野郎、絶対にぶつ倒してやる!

「イイイイイイイイイイイイイ!」

「「うわああああああああ!…?」」

すると突然、背後からアコイルが“嫌な音”を放つてきたので

俺達は反射的に耳を塞いでしまった。

レッドは勢い良くニヨロゾを投げて、両手を使って両耳を塞いだ。

「レッドー？」

「し、しまった、ニヨロゾー...」

俺がレッドに叫ぶとレッドは自分がした行為が分かつて、ニヨロゾを捕まえる為にニヨロゾに向かって走り出した。
だが、

「おつとー。」

「ま、マチス！？」

マチスがニヨロゾの右腕を掴んだので、レッドは走るのを止めて立ち止まった。

するとマチスは不適に笑いながらニヨロゾを海に落とそうとした。

「や、止めるー！」

「させらるかーー。」

俺とレッドはマチスに向かつて走り出そうとしたが、マチスの四体のレアコイルが俺達を電気の檻に閉じ込めてきた。

クソッ、何て堅い電気の檻なんだ！！

「ガハハハハ！！有刺鉄線よりキツい電気の檻だ！脱出は不可能だな。」

マチスは俺達の電気の巻の事を言って、ニコロジを海へ放り投げた。

あつ

『ノルマ』、『アロウ』

レッドは絶望した顔をしながら、一々口ゾゾが落ちた場所を見ながらそう言った。

クツ、彼らラプラスが外で待機してゐるからつてニヨロゾを助けに行くのに時間が掛かる。

そして俺達の今の状況……無事に終わるなんて無理だ。

すると俺達を電気の檻で閉じ込めていいる四体のレアコイル達と、マチスの隣に居るエレブーが体に電気を溜め始めた。

や、
ヤバ
い
！

「さて、我々を『ソソノソ嗅ぎ回る奴等はどういつ事になるか……思
い知るが良い……」

マチスがそう言つと、俺達に向かつて四体のレアコイル達とエレ
ブーが“十万ボルト”を放つてきた。

体に今迄感じた事の無い痛みが襲ってきて、俺とレッドは大声で悲鳴を上げた。

ヤツベニ　痛みの所為で、体が言う事を聞かねエ

「ハ、あなたは此こだいじ。」

マチスがそう言つて指を鳴らすと、レアコイル達が海の上に移動して電気の檻を解除した。

チク……ショウ、体が……レッド……イエロー……

俺は後悔しながら海に落ちた。

s i d e = 三人称

ドボドッボー——ン——！

レアコイル達が電気の檻を解除した事により、その中に居たレッドとレインボーは重力によつて海に落ちた。

レッドとレインボーが落ちた場所からは泡がブクブクと出ていたが、次第に少なくなつていきレインボーの方の泡が完全に無くなつた。

「銀髪の方は死んだが、黒髪の方ももう直ぐ死ぬか。」

マチスは笑いながらレッドとレインボーが落ちた場所を見ながらそう言つた。

ドオオオオオン——！

すると突然、海からレッドを抱えた“何か”が現れた。

レッドを抱えた“何か”はサントアンヌ号の甲板に下り、マチスの前に立つた。

「ここよ、ニヨロボン！？」

マチスが驚きながらレッドを抱えていた“何か”的名前・ニヨロボンの名前を言つた。

ニヨロボンは抱えていたレッドを甲板にゆっくり寝かせ、マチスとエレブーを睨み付けた。

「クソッ！！行けっ、エレブー！！」

マチスはエレブーにそう言つて、エレブーはニヨロボンに“電撃波”を放つた。

しかしニヨロボンは意図も簡単に“電撃波”を跳ね返した。

「う……。ま、任せたぞ、エレブー。」

マチスは勝てないと思ったのか、先程逃出して強氣な声ではなく弱々しい声でエレブーにそう言つて逃げ出した。

エレブーはニヨロボンに攻撃を跳ね返されたのが気に入らなかつたのか、切れでニヨロボンに突っ込んだ。

そしてニヨロボンとエレブーは互いの手を握り合って力と力をぶつけていると、ニヨロボンは両腕に力を込めた。

「 × ！？」

「ん？」

エレブーの悲鳴が聞こえたのでマチスは足を止めて後ろを見ると、

エレブーが悲鳴を上げながらマチスの方に飛んで来ていた。

「なつ！？ち、 “ 地球投げ ” ！？」

マチスはエレブーが受けた技を言いつと、避ける事が出来ずにエレブーと一緒に海に落ちて行つた。

sideレイン

：

：

：

：

：

「…………んあ？此処は何処だ？」

俺は目を覚ますと視界は青空で広がっていたので、少しパニクリながらも上半身を起こして場所を確認した。

『『『レイン（君）！…』』』

すると突然俺のポケモン達がボールから出てきて、ロコモンとグレイシアが俺の胸に飛び込んできた。

「な、何で皆出てきてるんだよ?」

『何でじやないよー…どれだけ心配したと思つてゐるの…』

『幾ら何でも無茶し過ぎです…どうして私達を出してくれなかつたんですか!』

俺が驚きながら聞くと、ロコンビグレイシアが怒りながら俺にそう言つてきた。

ボーマンダ達も何時もより少し怒つた顔をしながら、俺の顔を見ていた。

……そい言えば俺、レアコイル四体とエレブーの“十万ボルト”、否、五体から“十万ボルト”を受けたから“五十万ボルト”か。

“五十万ボルト”を喰らつて海に落とされて……其処で意識を失つたんだ。

『僕がレインを助けたんだ。急に落ちてくるから吃驚しちやつたよ。』

「……そうだったのか。」

ラプラスが俺を助けてくれたのか、って事はレッドは原作通り一ヨロボンに助けて貰つたのか。

だとすると、無事に事件は解決したんだな。

良かつたよかって『『『良くて!』』』……へつ?

『良いかレイン、お前は“トキワの力”が在るとは言え普通の人間なんだ。今回は“運良く”助かったが、死んでたかもしれないんだぞ?』

『レインは俺達の事を思つて選択した答えなのかもしれない、だが
レイン、お前が死んだら水の泡じゃないか。』

するとバンギラスとボーマンダが、俺に怒った声をしながらそりそり
言つて來た。

……確かに、今回の事件で俺は命を落としそうになつた。
だが偶々運が良くて、今はこつやつて生きている。

……はあ、何て俺は馬鹿な奴なんだ。

此處は漫画の世界じゃない、現実なんだ。

生きていれば死ぬ事だつてあるんだ、もっと考えて行動しないと
な。

『レイン、君はイエローちゃんと約束したんだろ?』

ルカリオが俺の手を両手で包みながら、優しい目をして聞いてきた。
た。

……俺はイエローと約束したんだ、“必ず帰る”つて。
だから、こんな所で死んでしまつたら約束を破つちまつ。

「……世間から色々言われるが、皆の力を借りても良いか?」

『『『勿論!』』』

「…………ありがとう。」

俺は嬉し涙を流しながら、皆にお礼を言った。

そして皆と力を合わせてロケット団と戦つて行く事を誓つて、心
配してゐるであろうレッドが居る所に行つた。

勿論、皆にはちゃんとボールに戻つて貰つたぜ?

そしてレッドが居る場所に行くと本気でレッドに心配された。

俺はレッドに心配されてまた涙が出そうなつたが、フーテインを見て氣絶した会長を見て一気に冷めた。

……うん、この人は色々な所が残念でダメだな。
しかし、今日は色々と濃い一日だつたな。
俺は青空を見てそう思った。

No.25 VSヘルパー 其の2（後書き）

次回は自転車レースに挑戦する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0978u/>

ポケットモンスター S P E C I A L 虹（レインボー）のトキワの力
2011年12月18日23時46分発行